

真剣で達人に恋しなさい

双龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

長老から謙一に突如川神学園生の護衛の話が舞い込んでくる、史上最強の弟子と武士娘たちの共演が今始まろうとしていた。

2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話	1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
113	109	102	98	91	86	80	76	67	61	53	49	45	40	36	31	23	17	13	9	5	1

目次

1話

松江市内某所とある道場から悲鳴が上がっていた。

「うぎやああああああ」

「ほらほら兼一くんペースが落ちてきているよ」

その道場ではハムスターの回転車を大きくしたものをすごい速度で回転させその中では一人の青年が走りながら悲鳴を上げていた、そして青年が走るスピードを落としたり転がったりしたら電流が流れる仕掛けが施されていた。

「こ、岬越寺師匠!!」

「なんだい?」

「僕は何時になったらこの基礎修行が終わるんでしょうか!!」

「バカなことを言っただけいけない、基礎修行に終わりなどない、むしろ君が強くなる度に修行が厳しくなるだろう」

「そ、そんな・・・あつ?ぎやああああ」

その青年は師匠の言葉を聞くと滑車の中で足を滑らせてしまい電流が彼を襲った。

「ほら、油断するからそうなるんだ」

青年は電流のシートに当たり気絶してしまった、そして隣にいた師匠は青年を滑車から出し地面に寝かせた。

「また、兼一の奴しくじったのか?」

「ああ、アパチャイの御百度参りも効かなかったよ」

「また、気絶・・・か」

「直ぐにおいちゃんが起こしてあげるね」

兼一と呼ばれている青年が倒れると道場の中から続々と人が出てきて兼一を囲んでいった。

ここは武術を極めた達人が住む場所梁山泊そこには八人の達人たちが住んでいた。

ケンカ百段の空手家 逆鬼至緒

哲学する柔術家 岬越寺秋雨

裏ムエタイ界の死神 アパチャイホパチャイ

あらゆる中国拳法の達人 馬劍星

劍と兵器の申し子 香坂しぐれ

そして地面に倒れているのは梁山泊全員の一番弟子で元いじめられっ子そして少し前に達人となった史上最強の弟子白浜兼一

「おお、ケンちゃん何を寝ておるんじや?」

最後に道場から筋骨粒々とした老人が出てきた、その人こそ梁山泊の長老で無敵超人 風林寺隼人である、この七人に所要で出掛けている、長老の孫娘で風を斬る羽 風林寺美羽を加えた八人が住んでいた。

五年前兼一たちは闇の武術家たちとの闘い九遠の落日で勝利を収め、その三年後に美羽がそして去年は兼一が見事達人の領域に足を踏み入れていた。

その日の夜兼一の師匠たち六人は居間で梁山泊豪傑会議をしていた。

「なんだよじじい、いきなり豪傑会議って」

「うむ、美羽は去年から裏社会の仕事で梁山泊を離れておる」

「アパチャイ、美羽居ないと寂しいよ」

「長老まさか!?!」

察しの良い秋雨は長老の話の運びである結論にいたった。

「うむ、ケンちゃんにも一人で仕事を頼もうと思つての」

「ぶっ!?!」

長老の突然の提案に酒を飲んでいた逆鬼は噴いてしまい、他の達人たちも難色を示した。

「じじいバカ言うな、兼一が達人になったのはついこの間だ、裏社会の仕事は早すぎるだろ」

「おいちゃんも逆鬼どんと同じ意見ね」

「アパパ・・・」

「・・・」

「秋雨、お前もそう思うだろ?」

「確かに」

「まあ待ちなさい、誰も裏社会とは言つたらん実はワシの知り合いで

川神で学園をしとる男が居るんじゃが」

「川神というと長老のお知り合いというのは川神院の総代の川神鉄心殿ですか?」

「川神鉄心が聞いたことあるぜ、確かその孫娘が武神とか呼ばれてる筈だ」

「おいちゃんの知り合いにも川神院で師範代をしている男がいるね」

「アパ?」

「?」

アパチャイとしぐれ以外の師匠たちは川神院を知っていた、そして長老が話を続けた。

「その鉄心から学園の生徒が闇に狙われとるようなんじゃ」

「緒方ですか?」

「それはまだ分からん、じゃから先にケンちゃんを川神に向かわせ、闇が乗り込もうとしてきたらワシらも出る、川神自体は危険な土地ではないからの」

「なるほどしかし何故兼一君を行かせるのです?」

「うむ、鉄心の策では学園に通わせたいそうなんじゃ、適任はケンちゃんを置いて他になかろう?」

「だが兼一だつてもう二十四だぜ?学園には通えねえだろ」

「そこは鉄心が何とかするとおつておる、どう思う?秋雨君」

「まあ良いのではないでしょうか、兼一君も妙手から達人に足を踏み入れ修行も行き詰まっていましたし、良い刺激になるのではないかと、それに向こうにいるものたちは表の世界の達人たち、今の兼一君なら問題ないでしょう」

「まあ、川神なら闇が来ても俺たちがすぐに向かえるか、ならいいんじゃないねえか」

「そうね、おいちゃんの知り合いにも連絡しておくね」

「アパ兼一何処か行くのかよ?」

「兼一居なくなる・・・のか?」

「少しの間の事じゃ、それでは皆ケンちゃんを川神に向かわせるといふことで良いかの?」

しぐれとアパチャイも兼一が居なくなることには気を落としたが兼一の為と思ひ全員が頷いた、その頃兼一は自分の部屋でスヤスヤと寝ていた、これから大変な目に合うとも知らずに。

2話

次の日の朝兼一は師匠たち全員から呼び出されていた。

(うーん師匠たち全員が呼ぶなんて何だろ?・・・凄く嫌な予感がするけど)

師匠たちの待つ部屋の前に立つと兼一は身震いする身体を止めるために自分の頬を叩いた、兼一は震えが止まったのを確認すると部屋の扉を開けた。

「!?」

扉を開けると師匠たち全員が闘気を兼一に向かって放った、昔の兼一ならば倒れていただろうが今回の兼一は自分の足で部屋の中に入った、それを見て師匠たちはニヤリと笑った、そして兼一は師匠たちの前で正座をした。

「あ、あのく何か用でしょうか?」

「うむ今回はワシからケンちゃんに頼みたい事があつての」

「長老が!?(いったいどんなメチャクチャな事をやらされるんだろ・・・)」

長老のお願いは何時も兼一の想像の上をいくことばかりで命を懸けることが多いので何をさせられるか兼一は不安でいっぱいだった。

「実はの川神に行つてほしいんじやよ」

「は?、川神つてあの神奈川の川神ですか?」

「うむ、お主も何度かワシ等と行つたことがあるじやろ?」

「ええ九鬼財閥の方の依頼で何度か、でも何で僕が川神に?」

「フム、実はのワシの知り合いで川神鉄心という男が居るんじや、鉄心は川神院という道場の総代兼川神学園の学長でその男からワシに依頼が来た、そして今回の依頼はケンちゃんが適任だと思ひ任せる事にしたんじや」

「ど、どんな依頼なんですか?」

「鉄心の話では学園の生徒たちが闇の者たちに狙われとるようなんじや」

「闇に?」

「そこでケンちゃんには川神に行ってもらって学園に通いながら闇の動向を探ってくれ、闇が乗り込もうとしてきたらワシ等も川神に向かう」

「それは良いですけど、僕もう24なんですけど」

「その学園には九鬼のヒュームも通つとるようだから歳は関係なからう」

「ヒュームさんが!?あの人はかなりの歳なのに、何で学園に通ってるんですか?」

「九鬼の一番下の娘が学園に通うから護衛だそうじゃ」

「一番下紋白ちゃんか!?久しぶりに会えるかな・・・」

川神には世界でも有名な九鬼財閥の本社がある、そしてそこには九鬼財閥のトップ九鬼帝の子供が三人いた、長女の九鬼揚羽、長男の九鬼英雄、そしてその二人と腹違いの妹九鬼紋白がいた、元々紋白は実の母の元において九鬼の家とは関わらず別の場所で暮らしていた、だが紋白は幼くして九鬼の血が色濃く出ており、子供とは思えない胆力そして覇気更には学力も子供のものではなかった。

長老はまだ九遠の落日が始まる前、紋白の母が病死し紋白を九鬼本社ビル護衛するという仕事を旧友のヒュームから依頼され、その時若い紋白の心をカバーするために兼一と一緒に連れて行っており、その時に兼一と紋白は仲良くなっていた。

「ケンちゃんどうじゃ?この任務受けてもらえるかの?」

すると兼一はなんのためらいもなく師匠たちの目を見て言った。

「はい!!、もう龍斗や里巳君のようなYOMIを作らせる訳にはいきませんが、行かせて下さい長老」

(迷いも無しか、ケンちゃんも度胸がついてきたの)

長老がそう思う中他の師匠たちもケンイチの成長を心の中で喜んでいた。

「いやいやケンちゃんが受けてくれてよかったわい」

「まあケンちゃんが断るならおいちゃんが行っても良かったね」

「それは別の意味で生徒たちがヤバいじゃねえか」

「イヤーでも残念だな、僕がここを離れるということは岬越寺師匠の

機械で基礎修行が出来なくなるってことですよもんね」

兼一は秋雨の命の危険のある修行ができなくなると思い内心喜んでいた。

「そこは安心したまえ兼一君」

「は？」

「アパチャイに頼んで道具は君の住む場所に送るから」

「え？（あ、でも使わなければいいのか）」

「兼一君サボるようなことがあったらどうなるか分かっているね？」

秋雨はニコリ笑いながら兼一の両肩に手を置いた。

「あのおにサボるとどうなるんでしょうか」

「あの私の修行マッシーンが可愛く見えるような修行をさせてあげるよ」

「一日たりともサボりません!!」

「うん、良い返事だ」

「で、長老何時行くんですか？」

「もちろん今からじゃ」

「す、直ぐに準備してきます!!」

そして30分後師匠たちは梁山泊の門の前で兼一を待っていた。

「お待たせしました」

「では行こうかの、皆のものの留守は頼んだぞ」

師匠たちはコクリと頷いた、そして兼一も師匠たちに一礼をした。

「弟子一号白浜兼一行ってきます」

「気を付けて行ってくるんだよ」

「修行サボるんじゃねえぞ」

「ケンちゃん女子高生の生写真期待してるね」

「アパケンイチ、後で秋雨の機械持っていくよ」

「兼一気を付けて・・・いけ」

「では行くぞケンちゃん」

「あれ？長老駅はこっちですよ？」

「バカなことを言うでない走っていくのじゃ」

「そ、そんな川神なんて県越えしなきゃいけないですよ!?!どれだけ

あると思ってるんですか」

兼一がそう言っていると長老が自分の腰に紐を巻き付けそれを兼一の腰に着けていた。

「な、何ですこの紐は!?!」

「ワシが川神まで引つ張ってやるわい、ちゃんとワシについてこない
と川神まで引きずられながら行くことになるぞい」

「ぞ、そんな無茶苦茶なー！ー!!」

長老は兼一を引つ張りながら走って行ってしまった、師匠たちはそれを
見て次に会うときはどれだけ成長しているかを楽しみにするの
であった、とうの兼一は長老に引つ張られながら無事川神に着けるよ
うに心の中で祈るのであった。

3話

梁山泊を出発した兼一は一時間後川神大橋に到着し鉄橋の天辺で休憩していた。

「ほほほ、ケンちゃんよくついてこれたの」

「ハアハア・・・死ぬかと思いましたよ」

「まあ何事も経験じゃよ」

（こんな経験したくなかった・・・）

兼一がガクリと肩を落として休んでいると、下から人の声が聞こえてきて二人は下を覗きこんだ。

「何だろ？・・・あ!?橋の下で女の子が戦ってる」

「ふむ、あの娘は確か」

「知ってるんですか？長老」

「あの娘が来る途中に話した武神と呼ばれる娘じゃ、名は川神百代」

「ああ、あの娘が（とゆうか長老に引つ張られながらも長老の話を聞けるようになってしまったんだな、異常さに馴れてきている自分が怖い）

兼一たちが上で見物している中橋の下では川神百代が胴着を着た空手家風の男と戦っていた、だが男は既にボロボロで百代とある程度距離を取っていた。

「こんなんで義経ちゃんに挑もうとしたのか？」

「くっ、武神め貴様さえいなければ義経を血祭りにできるものを」

「いや、私に一撃も当てられない時点で勝ち目はないだろ」

「ぬかせ!!」

すると男は一瞬で百代の懐に入り正拳突きを放った、だが百代はその正拳突きをすんでの所で躲し男の側面に回った。

「スピードは中々だが攻撃がなっていないな、私が本物を見せてやる、川神流 無双正拳突き!!」

百代は相手の横っ腹に全力の正拳突きを放った、攻撃を受けた男は吹っ飛ばされ橋の足にぶつかり倒れた。

「凄いなあの娘」

「うむ、しかしまだ妙手の域を出とらんようじゃな」

「ええ、それに・・・」

「それになんじや?」

「彼女の目に少し闇を見ました」

「恐らくあの娘は飽いておるのじやろう」

「何に飽きるんですか?」

「自分よりも強いものが少なく、そしてたまに戦う相手は自分よりも各下ばかり、あの娘は抑圧されとるんじや、これは川神は闇にはうつつつけの土地かもしれんな」

「僕は対戦相手には恵まれていたんですね」

「そうじやな、じやがほんとにもったいないケンちゃん以上に武の才能はあるじやろうにな」

「長老それを言わないで下さいよ」

「すまんかったなケンちゃん、さて川神院に向かうかの」

長老たちは橋の天辺から姿を消した、百代は長老たちが移動する時に一瞬だけ気配を感じ橋に目をやったがそのとき既に二人は橋の上には居なかつた。

「誰かいたような・・・気のせいか、しかし義経ちゃんの露払いもだいぶ数が減ってきたな」

百代は身体を伸ばしながら退屈そうに言った、そして百代もその場を後にした。

長老たちは橋の上から移動すると程無くして川神院に到着した。

「うわあ、大きい道場ですね」

「この中に鉄心が居るはずじや、ケンちゃん離れずについてくんじやぞ」

「は、はい!!」

長老たちが中に入ると袴の老人が二人を出迎えるために待っていた。

「おお、隼人待っておったぞ」

「久しぶりじやの、鉄心」

長老と鉄心の二人は出会い頭に握手をした、すると鉄心は兼一の方に目を向けた。

「隼人この子が例の」

「そうじゃワシ等梁山泊の一番弟子じゃ、ケンちゃん挨拶をせい」

「あ、はいはじめまして鉄心さん、梁山泊一番弟子の白浜兼一です」

「ワシは川神学園学長兼川神院総代の川神鉄心じゃ、よろしくの兼一君」

兼一も鉄心と握手をした、すると鉄心の顔色が突然変わった。

(な、なんとすんだ静の気じゃ、この若さでここまでの静の気が練れるとは梁山泊の一番弟子の名は伊達ではないのう)

「あ、あのく鉄心さん」

ずっと握手した手を離さない鉄心を心配し、兼一は顔を覗きこんだ。

「おおすまんな兼一君、凄い静の気を感じたので驚いただけじゃ、それにしてもすまんな隼人 兼一君お主等に迷惑をかけてしまって」

「いえ、若い武術家が狙われているなら守ってあげたいんです」

「ワシ等も協力は惜しまんよ鉄心」

「重ね重ねすまんな」

「所でお主の孫娘を見かけたんじゃが」

「おお、もう百代に会ったのか」

「直接声をかけたわけではないがの」

「隼人から見て百代はどうじゃ?」

「うむ、才能に溢れ身体も丈夫川神流もほぼマスターしとるようじゃが、心の方がまだまだじゃな妙手を抜けられないのはそのせいじゃろうて」

兼一が鉄心を見ると鉄心は苦い顔をしていた、それはまるで長老の答えがわかっていたような顔だった。

「なにせ百代と全力で戦えるものが少ないからの、ワシも百代とは簡単には戦えんし」

そう鉄心と百代が手合わせをするときは川神市に手続きをしなくてはならず、例え手続きが通っても数秒間位の短い組手しか行えないのである、そんな事を話していると川神院の入り口の方から大きな気が近づいて来るのが兼一たち三人は分かった。

「百代が帰って来たようじゃな」

「そうじゃの」

「おーいじじい帰ったぞ、!?!」

百代は鉄心の隣にいる長老を見た瞬間に分かった、この人は達人だと、百代は走って長老の前に立ったすると百代は深々とお辞儀をした。

「はじめまして川神百代です!!」

「おお礼儀正しいの娘さんじゃの、ワシは風林寺隼人じゃ」

「風林寺隼人!?!、無敵超人と名高い梁山泊の達人のうちの一人・・・」

「おお、梁山泊を知つとるのか」

「私武人ですよ?知らない方が可笑しいですよ」

「それもそうじゃな、隣にいるのはワシ等梁山泊の一番弟子の白浜兼一君じゃ」

「どうもはじめまして川神さん白浜兼一といいます」

「貴方も知ってますよ、梁山泊全員の教えを受けた最強の弟子・・・いつか会ってみたかった」

「こ、光栄です」

すると百代は身震いを始め兼一の目を見た。

「お願いがあります兼一さん、私と戦ってください」
「ええ!?!」

突然の百代からの申し出に戸惑う兼一、だが百代の顔は真剣そのものであった、そして時を同じくして一人の達人が川神入りしていた。

「美少女たちがおいちゃんを呼んでるね!」

それは兼一の師匠の一人あらゆる中国拳法の達人 馬剣星その人であった。

4話

突然の戦いたいという百代の提案に兼一は戸惑っていた、兼一は女性を殴ることをしないことを信念としているからである。

(参ったな、川神さんは戦闘好きだと聞いてたけどいきなり勝負を挑まれるとは考えてなかったよ)

「お願いします!!私のもっと強くなりたいんです」

「川神さん貴女は何で強くなりたいんですか?」

「な、何でって考えたことは無いですけど、しいていえば武人だからですかね?」

「そうですね(ただ闇雲に強さを求めるか・・・川神さんは闇に誘われる可能性が高いかな)」

「お願いします!!」

「分かりました、ただし今回僕は貴女に手をかけるようなことはしません」

「は?」

「貴女の戦う意欲を無くして見せます」

「兼一さん私を舐めてます?」

武神と呼ばれている自分にたいして手をかけないと言う兼一の言動に百代は苛立ちを隠せないでいた。

「別に舐めてませんよただ」

「ただ?」

「今の川神さんにはこういう戦いが必要だと感じたんです」

「言ってる意味が分からないんですが」

「今は分からないでしょうが、貴女なら必ず分かる時がきますよ、どうします?それでも良ければ貴女の相手をします」

(実際手をかけないとは言ってるが私と戦っているうちにそんな気は無くなるか・・・)

「分かりました、それで構いません」

「ではこの勝負見届け人はワシと鉄心が勤めよう」

いままで黙っていた長老と鉄心が兼一たちの間に入った、兼一たち

もそれを了承し長老たちに見守られる中兼一と百代は勝負の準備を始めた。

時は少しさかのぼり川神入りしていた剣星は河原を歩いていた。

「いやー川神はおいちゃんに向いてる町ね川神学園の制服も可愛いし、いろんな服を着てる子もいるしね軍服にメイド服に和服に袴、川神学園の学長の意向でお金を出せば服装が自由になるらしいね、この学長とはおいちゃん話が合いそうね、さして着いたね」

剣星が川神に来て最初に訪れたのは世界でもトップクラスの大企業九鬼極東本部ビルだった、そして剣星がビルの中に入ると、三人の九鬼の従者たちの間に戦慄が走った。

「何でしょうこの気は？」

「フアック!!何かヤバい感じだ、あずみもヒュームのじじいも居ねえし参ったな」

「この気はまさか!？」

剣星は手近なメイドを捕まえて話しかけた。

「お嬢ちゃん♪ちよつと頼みがあるんだけどね？」

「は、はい何でしょうか？」

「従者部隊の序列16位の李静初を呼んできてくれんかね？」

「李さんですね？」

「うむ馬と言えれば分かる筈ね」

メイドが探しに行こうとした時九鬼のエレベーターが開く音がして剣星はそつちを見た、するとメイド服に身を包んだアジア系の女性が降りてきて剣星に近づいて来た。

「お久しぶりです、師父」

「元気そうだね静初」

「はいお陰さまで序列も上がり十六位にまでなれました」

「強くなっているようね、体つきや目を見れば分かるよ」

「私は師に恵まれました、師父に指導していただき、こちらに来てからも良い師に会えました」

「それは良かったね」

「李、お客様を客間にお通ししたらどうですか？」

静初の後ろから声が聞こえ、劍星は静初の後ろを覗きこんだ、すると白髪の燕尾服を着た老人が近づいて来た。

「お初にお目にかかります、馬劍星様」

「おいちゃんを知ってるのかね?」

「梁山泊の達人の御一人であらゆる中国拳法の達人、申し遅れました私九鬼家従者部隊序列三位クラウドイオ ネエロと申します」

（九鬼家従者部隊でヒューム ヘルシングと並ぶクラウドイオとはこの男かね、中々の実力者のようね）

「では客間にご案内しましょう」

「せっかくだけど今回はこれで失礼させてもらうね、静初に伝言しにきただけだからね」

「何ですか?」

「今度からおいちちゃんたちの弟子が川神学園に通うことになってね」「兼一さんがですか」

李やクラウドイオ九鬼の主要人間は前の任務の時に兼一を紹介されたので面識があった。

「実は川神学園の生徒を闇の連中が狙つとるらしいね」

「闇が・・・」

「紋様や九鬼の皆様は私が守ります」

「私がじゃねえだろ、私たちだろ李」

李の後ろから金髪のメイドが突然現れ、劍星はカメラを構えた。

「なんと金髪メイドかね、しかも美人ね!!」

「うわ!?なんだこのじいさんは」

「師父カメラをしまってください、紹介します私の九鬼に入る前の師匠で」

「馬 劍星ね!!」

「アタシは九鬼家従者部隊序列十五位ステイシー コナーだ、このビルに入った凄い気の正体はあんただったんだな」

「そうね、さすがに気づいたかね」

「ステイシー 劍星様は梁山泊の達人のお一人ですよ」

「梁山泊?!こりやまた最高にロツクなお客様だな!!」

(この子も中々の死線を潜り抜けて来ているようね、傭兵といったところかね)

静初はステイシーに剣星の紹介をするため二人で話しこんだ、それを剣星はクラウディオと一緒に見ていた。

「闇がとうとう川神に來ますか・・・これはマズイことになりましたね」

「でも川神には良い若者が揃っているようね」

「ええ、それは私もそう思います」

「おいちゃんたちの出番は無いかもしれんね」

「そうかもしれませんね」

「それじゃおいちゃんに行くね、静初それじゃあね」

「あ、はいわざわざありがとうございました」

「あ、それとケンちゃんに何か困ったことがあつたら力を貸してやってほしいね」

剣星のお願いに静初たち三人はコクリと頷いて答えた、剣星は安心したように九鬼のビルを後にした。

そして時を同じくして川神院では川神百代対白浜兼一の勝負の火蓋が切られようとしていた。

5話

兼一と百代二人の武術家は互いに向かい合い見届け人である長老たちの開始の合図を待っていた。

「それではお互い悔いの無いように戦うのじゃ」

「それとお主等の四方には結界をワシと隼人で張る、並大抵の攻撃では碎けぬから回りは気にせず戦うのじゃ」

「はい」

「それでは始め!!」

最初に行動を起こしたのは百代だった、百代は兼一との間合いを一瞬で詰め懐に入った。

「川神流無双正拳突き 連打!!」

百代は自分の一番得意な技正拳突きの連撃を兼一に浴びせた、だが兼一はその拳を全て躲しながら百代の目をじっと見ていた。

(これが噂に聞く流水制空圏か!?)

(川神さんは長老の言うとおり今の自分の世界に飽きている、このままでは闇が新しい世界を彼女に見せたらやはり危ない)

「流石兼一さんそれが噂の流水制空圏ですか、ならこれならどうです、川神流星殺し!!」

百代は自分の拳に気を集中させ星をも貫く光線を兼一に向かってゼロ距離で放った、だが兼一は流水制空圏でそれも躲してみせた。

「これも躲すんですか、でも躲してばかりじゃ全く楽しめませんよ」

「そうですね分かりました、なら今度は僕から行きます、岬越寺流 柳葉ゆらし」

「!？」

兼一は柔道特有の足さばきを使い百代の死角に入り込み姿を消した。

「ど、何処に行ったんだ!？」

「此方です」

「な!？」

兼一は百代の側面に回り込むと、百代は突如くるりと空中で一回転

し倒された。

(な、なんだ何で私は掴まれてもいないのに投げられたんだ?)

「岬越寺流 真呼吸投げ(実戦で始めて決まりましたよ岬越寺師匠、血の滲む思いで会得した柳葉ゆらしと真呼吸投げ!!)」

兼一は闇との決戦の後気の掌握を会得したことにより 秋雨から気あたりで相手の回避本能を刺激して投げる技真呼吸投げを教わっていた、兼一は女性を殴れないので秋雨はそれを考慮してこの技と特別な足運びが必要な柳葉ゆらしを教えた、だが兼一は要領が悪く二年の間秋雨の地獄の特訓を続けてやっと会得した、まさに血の滲んだ技である。

倒された百代は素早く身体を起こして拳を構え兼一を見た。

「まさか手を使わずに投げられるとは思わなかったですよ」

「実戦で使うのはこれが初めてなんですよ(良かったー決まって、決まらなかったら長老から岬越寺師匠に伝わってまた地獄の特訓が始まってたところだよ)」

「でもまだまだやらせてもらいます、よ!!」

百代はまた兼一の懐に入り正拳突き of 連打を放った、兼一も流水制空圏を張り防御した。

「またその防御技ですか、それじゃわたしには勝てません、よ!!」

「川神さん僕はまだこの技の一段階目しか見せてませんよ、まず第一段階相手の動きに合わせる」

「くっ、ならこれでどうだ禁じ手 富士砕き!!」

「第二段階目相手の動きと一つになる」

「なっ!？」

兼一は百代の背中に回り込み百代と全く同じ体勢になった。

「そして第三段階自分の動きに相手を乗せる!!」

「え?」

流水制空圏の第三段階を受けて百代はいつの間にか全身の力が抜け、地面に寝かされて動けなかった。

(な、なんだ力が入らない!?!、しかし何故か不思議と気分は悪くない)

「川神さん、大丈夫ですか?」

「完敗です兼一さん」

「気はすみました？」

「ここまで実力の差があるとは思いませんでしたよ、私はまだまだ弱い」

「川神さん貴女の世界はまだ狭い、この世界には貴女の上をいく達人がうようよいます」

「そうかうようよか・・・こりや私もうかうかしてられませんね」

百代はやつと身体を動かせるようになり立ち上がって兼一の前に立った。

「兼一さん私はもつと強くなります、まだ強くなる目的はまだ見つからないけど必ず見つけます、それに」

「それに？」

「目標は出来ましたよ、まずは貴方だ貴方に勝ちたい、それが私の今の目標です」

「こりや僕もうかうかしてられないな」

百代と兼一は固く握手をした、すると結界を張っていた鉄心と長老が近づいて来た。

「負けたとはいえ達人相手にようやったのモモ」

「ふむよい勝負じゃったの」

近づいて来た鉄心に百代は自分から近づき頭を下げた。

「じじい頼みがあるんだ!!」

「なんじやモモ改まって？」

「私がサボってた基礎修行をつけてくれ頼む!!」

「モモ・・・分かった厳しい修行になることを覚悟しておくのじゃ!!」

「ああ!!」

「良かったですね川神さん」

「百代です」

「え？」

「百代って呼んでください、それと敬語も私には必要ありません」

「分かった百代さんこれからもよろしく」

「こちらこそ」

兼一と百代は再度固い握手をした、すると川神院の入り口から声が聞こえた。

「弁慶急いでくれ、この気はきつとあの人に違いない」

「義経はほんとにあの人好きだね、まあ私も嫌いじゃないけどさグビツ」

「もうそろそろ奴等が活動する時間だ、早く帰るぞ」

「与一ちゃんそんなこと言わずに行こー!」

「全く強引な」

兼一が入り口の方を見ると三人の女の子と一人の男の子が自分の方に走ってきた。

「あやっぱり居たぞ弁慶、お兄ちゃん!!」

「主の勘が当たったか」

「あの人もまた闇に狙われるものだからな、俺と引かれ合う定めか」

「流石義経ちゃん私そういう勘鈍いからな、良いなあ」

「ん、君たちは？ 僕何処かで会ったかな？」

「忘れてしまったのか!？」

「仕方ないよ義経結構前のことだし」

「俺たちも以前とは変わってしまったからな」

「そうだね背も延びたし」

「でも義経は覚えてて欲しかった、お兄ちゃんには・・・」

「え？」

俯く女の子の顔に兼一は昔九鬼家の依頼でとある島に行った時に守った少女の面影を見た。

「もしかして義経ちゃん？」

兼一の言葉に直ぐ義経という女の子は顔を上げて目をキラキラさせた。

「そうだ源義経だ、お兄ちゃん!!」

「なんだ義経ちゃんかすっかかり大きくなって、分からなかったよ」

兼一は義経の頭を優しく撫でた、それを見た二人の女の子が義経の隣に立った、そして兼一は両手で二人の頭を撫でた。

「じゃあ君たちは弁慶ちゃんに清楚ちゃんそれに与一君か、全員大き

くなつたな」

「♪」

「くすぐったいな」

「久しぶりだな兼一の兄貴」

今川神では武士道プランとゆう計画が進められていた、九鬼家従者部隊の序列2位で星の図書館の異名を持つマーブルが発案者で、彼女は現代の政治家に絶望しそんな政治家に国を任せるくらいなら自らの手で過去の偉人や英雄のクローンを誕生させ彼らに国を統治させようという計画である、そして手始めにマーブルは四人のクローンを誕生させた、その四人とは源義経 武蔵坊弁慶 那須与一 葉桜清楚の四人である、兼一は七年前に闇の武術家たちに狙われた義経たちを守る依頼を九鬼家から依頼されており義経たち四人とは面識があった。

「また君たちに会えるとは思わなかったな」

「お兄ちゃんの気が感じたから来てみたんだ、もしかして川神先輩と戦つたのか?」

「ああ」

「どっちが勝つたんだ」

「私が負けたよ、しかも兼一さんは一切攻撃せずにな」

「あの川神先輩を一切攻撃せずに倒すなんて流石はお兄ちゃん」

「武術の腕は格段に上がってるね」

「流石は兄貴」

「モモちゃんは怪我はなかった?」

「私を心配してくれる清楚ちゃんマジで清楚」

「ところでお兄ちゃんは今回何で川神に?」

兼一が長老や鉄心を見ると二人は話すなというサインを出した兼一も浅く頷き義経たちを見直した。

「実は川神学園の二年生に編入することになったんだ、師匠から少し勉強もしてこいって言われてさ」

「本当に!!義経たちも少し前に二年S組に入ったんだ」

「じゃあ兼兄と同じクラスになれるかもしれないね」

「闇に狙われるものがまた増えるか・・・」

「二年か残念だねモモちゃん」

「ああ、でもまあ同じ学園だからないつでも会えるだろ」

皆で話していると鉄心が大きく咳払いをして会話を止めた。

「とりあえずもう時間も遅い兼一君との積もる話しは明日学園でしたらどうじゃ？、モモお前ももうすぐ夕飯じゃ着替えてきなさい」

「空気が読めないじじいだ、なら兼一さんまた明日」

「分かった、ならお兄ちゃんまた明日皆行こう」

弁慶たちは義経の言うことに頷くと手を振りながら帰っていった。

「梁山泊の弟子は皆から好かれておるのう」

「そこがケンちゃんの良いところじゃからな」

兼一はこれから起こる闇との戦争に彼女たちを巻き込みたくない
と心の底から思っていた、だが運命の歯車は兼一の思惑とは裏腹に大
きく彼女たちを巻き込んでいく。

6話

百代や義経たちを見送ると川神院の修練場には兼一 長老 鉄心の三人のみとなった。

「しかしまさか百代でも手も足も出せんとはな」

「秋雨君の修行が実って良かったのケンちゃん」

「ええ、出来なかつたら岬越寺師匠の地獄の特訓の再来ですからね・・・」

兼一は秋雨の地獄の特訓を思いだし震えが止まらなかった。

「まあなんの修行かは聞かぬが、あれほどの技を修得するんじやからそういう特訓なんじやろうな」

「ええ、この世のものとは思えない特訓でしたよ・・・」

「さてお主の住むところじやが、ワシが用意しておいた」

「ありがとうございます、野宿でもするのかなと思いましたよ」

「ワシの学園の生徒にそんなことはさせんよ、お主の住むところは島津寮という所じや、地図を書いておいたからこれを頼りに向かってくれ、向こうに着いたら麗子という管理人が居るはずじや、もう話しは通してあるから行けば部屋は使えるようになってるじやろう」

「分かりました、何から何までありがとうございます!!」

兼一は鉄心にお礼をし着替えを済ませると川神院を後にした、そして島津寮に向かうため河原を長老と一緒に歩いていた。

「ケンちゃんやワシもこれで松江に帰るぞい」

「長老もありがとうございます、帰ったら師匠たちによろしく伝えて下さい」

「うむ、ケンちゃんや闇が相手でも心を強く持つことを忘れるでないぞ」

「はい!!」

長老はそう言い残すとジャンプしてそのまま走り去ってしまった。

「さて僕も島津寮に向かうとするか・・・ん？」

すると兼一の向かう先から二人の人が走ってくるのが兼一には見えた、ほどなくしてその二人は兼一の前で止まった、一人は髪は紫色

で長身の目鋭い目をした女性で、そしてもう一人は黒いシャツにこれまた背が高く座った目をした男だった。

「師匠こいつだよあの武神を手も触れずに倒したのは」

「まあそりやそうだろう、身体のできから流れる気まで尋常じゃねえ」

「あのく貴方は？（二人とも武術をやるな、女性の方の実力も中々だけど、男の方は格が違うな達人に近いものがある）」

「おっとこりやすまねえな、俺は元川神院師範代をやっていた釈迦堂刑部だ、こっちの女は俺の弟子で板垣亜巳」

「元というは今はやってないんですか？」

「まあ色々あつてな川神院と敵対したりもしたが、今はしがない梅屋の店員だ」

「梅屋？あの牛井チエーンのですか？」

「おうよ金柳街支店だ、来てくれたらサービスするぜ」

「あの釈迦堂さんそれで僕に何の用なんでしょう？」

「百代を軽くあしらう武術家がいるってこいつから聞いたもんでな、良ければ一つ手合わせ願おうかと思つて来たんだ」

兼一は釈迦堂の目をじっと見つめた、次の瞬間釈迦堂は兼一の目から逃れるためバックステップをした。

「まさかここまでとはな」

「師匠？」

「あの野郎今一瞬で俺を見透かしやがった」

「え？」

「そうだろ若い達人さんよ!!」

「釈迦堂さん貴方は師範代を辞めた後修行をしてない時期がありましたね？」

「そこまで見抜くとはな」

「修行を修めていれば達人になっていたでしょう、でもそれをしなかつたからまだ貴方は妙手を抜けきれていない」

「真正面から言われるとへこむものがあるな」

「ですが少しづつ貴方は前へと進みだしている」

「!？」

釈迦堂は川神院と敵対した後ヒュームに仕事を紹介してもらい生活を立て直し、そして武術も一から自分を鍛え直すために修行を再開していた。

「そんなことまでお見通しか・・・なら俺のかんを戻す手伝いをしてくれかい、達人さんよ!!」

「分かりました」

兼一は服を脱いだするとその下には胴着を着込んでいた、その胴着は上半身が空手と柔術の胴着、そして下半身はカンフーパンツとシューズ、腕にはムエタイのバンテージそして剣と兵器の申し子香坂しぐれ特製の鎖かたびらを着込んでいた。

「今の川神には一人でも多くの実力者が必要です、釈迦堂さん貴方には強さを取り戻してもらいます」

「なるほどな、その変な胴着を見てあんたの正体が分かったぜ、おい亜巳よく見とけこの男の戦い方をな」

「ああ分かったよ」

「達人たちが集う梁山泊の全達人を師匠に持つ最強の弟子、あんたが白浜兼一だな」

「はい」

「へっおもしれえ、さあいつでもいいぜ」

釈迦堂が構えると兼一も流水制空圏を発動し釈迦堂の目を見た。

（百代さんと気の質が似ている人だ、でも百代さんとはつきり違うところはこの人は危うくない、それだけ芯が一本入っているってことか）

兼一は亜巳の事をチラリと見ると釈迦堂の闇に堕ちない理由は彼女達弟子の存在が大きいのが分かった。

「よそ見してていいのかよ!!、ほらリングだ」

リング状の高密度の気弾が兼一に向かってきた、兼一はそれを楽々と躲した。

「そうだそっちに躲すよな、ジャストだぜ」

兼一がリングを躲すと躲した先には釈迦堂の拳が待っていた。

「川神流 大蠍撃ち!!」

(この突きは内臓まで来るヤバイ)

釈迦堂は素早く兼一の腹を殴り内臓を破壊しようとした、そして釈迦堂の思い通り釈迦堂の拳は兼一の腹に入り兼一を吹っ飛ばした。

「へっこれでおめえも終わり・・・!?!」

釈迦堂は自分の拳を見つめ、その後立ち上がった兼一を見て高笑い上げた。

「はははは!!なるほどな確かにアンタは達人だわ」

「どういうことだい? 師匠」

「俺の大蠍撃ちは身体の表面だけじゃなく内臓をも破壊する技だ、言っちゃまえば内臓がなかったら技の威力は半減される、よく見てみる」

亜巳が兼一の方を見ると兼一の腹には殴られた後が少し付いてるのみで兼一自体は内臓をやられたにしてはピンピンしていた。

「あんた内臓打たれたのに苦しくないのかい?」

「ええ、僕の空手の師匠直伝の特殊な呼吸で主要な内臓を肋にしまう内臓上げを使いました、それに中国拳法師匠は僕に内功を重点的に鍛えてくれましたから」

「やっぱりな殴った感触がおかしかったんだ、しかしおめえもおめえの師匠も化け物だな」

「ええ、よくここまで生きてられたなと自分でも思いますよ」

「はっ!!、違えねえ」

兼一の言葉に釈迦堂はまた笑いだした、たがすぐに拳を構え兼一を見た。

(まさか大蠍撃ちが効かねえとはこりやヤバイな)

「師匠の大蠍撃ちを使っても倒れないなんて奴なんて見たことなかったよ」

「とある市内の道場には何人かいると思いますよ」

「そりや化け物道場だね」

「ええそりやあもう」

「さあ、また俺から行かせてもらうぜ、川神流 無双正拳突き 連打!!」

釈迦堂は百代が放った技と同じものを兼一に向けて放った、だが威力と正確性は百代以上のものがあつた。

(流水制空圏発動!!)

(またそれかよ)

兼一はまた釈迦堂の目を見つめ全ての正拳突きを躲した、だが次の瞬間釈迦堂は新たな手に出た。

「禁じ手 富士砕き!!」

「コンパクトな正拳突きに大振りな一撃を混ぜる、初歩ですけど良い手ですね」

兼一は富士砕きを釈迦堂の懐にしゃがんで入ることで躲した。

「おめえに当たらなくちゃ意味無いけどな」

「今度は僕から行きます、小さく前ならえ!!」

「?」

突然の兼一の行動に釈迦堂も亜巳もどんな手で来るのか読めずいた、だがその答えはすぐに釈迦堂自身の身体に叩き込まれた。

「無拍子!!」

「ぐっ!!」

「師匠!?!」

(しまった強くやり過ぎたか!?)

釈迦堂は兼一渾身の無拍子をもろに腹にくらい吹き飛ばされた、吹き飛ばされた釈迦堂に兼一と亜巳が近づこうとしたその時吹き飛ばされた釈迦堂が来るなど手で二人を制した、そして釈迦堂は自分の足でふらふらになりながらも立ち上がった。

「良い突きだこれがあんたの渾身の技か?」

「他にも技がありますがこれは僕が初めて開発した技です、空手 柔術 中国拳法 ムエタイ 全ての動きを取り入れた突きです」

「なるほどなすげえ技だ、こりやアンタ以外に真似は出来ねえな」

「いや、一人だけこれを真似した人がいます」

「アンタのところは化け物だらけかよ、こんな突きを放つ奴が二人もいるのか」

「どうしますまだやりますか?」

「いや今回は俺の負けだ、アンタの突きまともに食らったからな、立つだけでやつとだわ」

すると亜巳が近づいて釈迦堂に肩を貸した、釈迦堂もそれを黙って受け入れた。

「良い技見せてもらったわ、だが次はこうはいかねえ」

「楽しみにしています」

釈迦堂と亜巳は立ち去ろうとした、すると夜の闇に消える前に釈迦堂が兼一の方を振り返った。

「それとアンタに頼みがある、川神学園に通うなら一子を、川神一子に目をかけてやってくれ」

「川神一子？百代さんと何か関係が？」

「妹だ、血は繋がってねえがな」

「なるほどで何の目をかければいいんですか？」

「一子も武術をやっている、百代を手助けするために川神院の師範代になるのがアイツの夢なんだ」

「お姉さんのためか良い妹さんですね」

「だがアイツの才能じゃ師範代は厳しいんだよ」

釈迦堂は悔しそうに拳を握りしめた、釈迦堂は元々自分によく似た百代を可愛がっていたが同時に才能は無いがひたむきに頑張る一子にも目をかけていた。

「僕の師匠が言っていました才能のある人間が必ず大成する訳じゃない信念のあるものが大成するんだと、一子さんにだって信念があれば夢は叶いますよ、それに僕は元いじめられっ子で師匠たち全員に武術の才能はないと言われましたけど、師匠は僕を信じ僕は師匠達を信じた結果達人にまでなれましたから」

釈迦堂は目を見開いて兼一を見るとこの男になら一子を任せられると思いい片腕を上げて夜の闇に消えていった。

「さて僕も島津寮に急がなくちゃ」

兼一も素早く着替えて島津寮へと向かって走っていった、そしてポロポロになった釈迦堂は亜巳の肩を借りて川神の危険地帯である親不孝通りを歩いていった。

「悪いな亜巳」

「いいさ」

「それはそうと白浜兼一の動きはちゃんと見てたな？」

「ああ師匠に言われたとおりね」

「お前は俺や天や辰子や竜兵誰とも違う武術家だ」

「どういう意味だい？」

「武術家には大きく分けて二つのタイプがある、常に心を静めて冷静さを武器に戦う静のタイプと怒りを爆発させてリミッターを外して戦う動のタイプだ、俺や天たちは動のタイプだがお前は静のタイプの武術家だ、俺とお前じゃ戦い方が違う、いままで技は教えたがこれ以上の事となると俺は正直教えられねえ、だがあの白浜兼一は静のタイプの達人だアイツの技はお前も修得できる可能性がある、例えば俺の攻撃を捌いた流水制空圏とかな」

「あの技をアタシがね・・・」

「まあ俺も詳しくは知らねえがな、あの技は無敵超人 風林寺隼人の秘技の一つだからな」

「そいつは師匠より強いのかい？」

「はっ、俺と白浜兼一が束になってもまだ勝てねえよ」

「まだってことはいつかは勝つ気かい？」

「へへへへさあな・・・まあおめえはアイツがこの街に居る間にあの技を吸収してみな」

「あたしのやり方でやって良いんだろ？」

「ああ任せる、さて俺もうかうかしてられねえ。天や辰子たちも川神院に入ったのは不幸中の幸いだったな」

「まあもう薬には頼れないからね」

板垣姉妹たちは少し前まで違法な薬を飲み、異常な強さを引き出す戦い方をしていたが直江大和たちの前に敗れ、現在は板垣天使と板垣辰子の二人は川神院で修行を、板垣亜巳は生活費を稼ぐために働きに、板垣竜兵は気ままに生きていた。

「俺もまだまだ強くなれる、これほど嬉しいことはねえな」

釈迦堂は笑った親不孝通りには釈迦堂の笑い声が響き、釈迦堂と亜

巳は親不孝通りの奥に消えていった。彼らの行動が兼一の運命をどう変えるのか、今はまだ誰も知らないのであった。

7話

兼一が島津寮の前に着くともうすでに夜の八時を回っていた。

「遅れちゃったな、すいませーん」

兼一が扉を開けると奥から目付きの鋭い青年が出てきた。

「ん、誰だ？」

「僕、今日からここでお世話になることになってる白浜兼一です。あの島津麗子さんは・・・」

「ああ麗子さんから話は聞いてますよ、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「俺は源忠勝ですよろしく」

「白浜兼一ですこちらこそよろしく（ん？電気が消えてるのに気配があるな）」

忠勝は兼一を寮に上げると食堂に案内した。そして忠勝が食堂のドアを開けると中は真っ暗だった。そして兼一が食堂に足を踏み入れた瞬間、電気が点き同時にクラツカーが鳴った。

食堂には豪華な料理とこの寮の住人たちがクラツカーを持ち兼一を見ていた。するとバンダナを被った青年が兼一に近づいた。

「よく来たな、アンタが兼一さんだな、麗子さんから聞いてるぜ。この寮の103号室に住んでる風間翔一だよよろしくな!!」

「白浜兼一です、よろしくね風間君」

「俺は102号室に住んでる直江大和です」

「自分は203号室に住んでるドイツから来た、クリステイアーネフリードリヒだ、クリスで構わない」

「直江君にクリスさんだね、よろしく」

すると次に挨拶に来た女の子に兼一は見知った人が居た事に驚いた。

「ゆ、由紀江ちゃん!？」

「お久しぶりです兼一さん」

「何だまゆまゆ、知り合いなのか？」

「ええ、私が実家に居た頃、私の父を訪ねて兼一さんとそのお師匠さん

が来てくれたんです。その時兼一さんたちは一月ばかりうちに滞在なさって」

「そういえば兼一さんは武術の達人なんだってな」

「うん、ここに来る前に川神百代さんとも戦ったしね」

兼一のその一言に食堂に居るものたちの間に衝撃が走った。百代に勝負を挑み外傷一つ兼一の身体には見受けられないからである。

「姉さんと戦ったんですか？」

「え、姉さん？百代さんが直江君の？」

「いや俺はあの人の舎弟なのでだから姉さんと俺は呼んでるんです。それで兼一さん姉さんと戦ってどうしたんですか？」

「一応勝ちました」

するとまた全員に衝撃が走った。白浜兼一の実力は知らないが、武神と謳われる川神百代にはほぼ無傷で勝ったと言っているからである。

「モモ先輩に勝てるとはすげえな」

「ああ、ほんとにそんな人間が居るとはな・・・」

「しかも無傷か、すげえだけじゃすまねえだろ」

「じゃあ、やっぱりこの小説の通りだね」

翔一達男性陣たちが驚いていると一人だけ女の子の声が混ざっていた。その声は兼一の後ろの廊下が続くドアから聞こえ、次の瞬間ドアが開くとショートカットの女の子が食堂に入ってきた。そしてその女の子の手には一つの本が握られていた。

「その本は!？」

「戦え 梁山泊、あたしこれ好きだよ。でも大和とは結婚したい」

「お友だちで、なるほど白浜兼一どつかで聞いたことがあると思ったらこの小説の作者の名前か」

「あの人、ところで君はどなた？」

「アタシは椎名京」

「椎名さんか、僕の小説を好きって言うってくれてありがとう」

「その小説俺も京に勧められて見たぜ、師匠の修行が面白そうだったな!!」

「風間君それはね、やってみれば面白いなんて言えないと思うよ」

「実体験って言ってる。ほんとなの？」

「リアリティー無いって言われるけど全部本当だよ」

「じゃあ元いじめられっ子て言うのも？」

「うん」

「そう・・・」

(なるほどこの子もいじめられてたんだな、しかも僕よりも酷い、だから同じくいじめられていた僕に会ってみたかったんだな)

流水を発動し京の辛い過去を兼一は少し覗いた。そして話が終わると京は大和の方に去っていき、次に兼一に話をかけてきたのはクリスだった。

「モモ先輩に勝つとは兼一殿はかなりの達人なんだな」

「それほどでもないよ、クリスさんも武術をやるんだね」

「言った覚えはなかったが」

「いや筋肉の付き方や手をみれば分かりますよ。僕の師匠の中には武器の達人もいますから」

「それは是非とも会ってみたいな」

クリスと少し談笑した兼一は次に由紀恵の元に来た。

「やあ由紀江ちゃん、ほんとに久しぶりだね。大成さんや沙也佳ちゃんも変わり無い？」

「ええ、二人とも元気です」

「兼一坊おいらの事も忘れてもらっちゃ困るぜ」

「ああ松風君もここにいたんだね」

「おいらとまゆっちは一心同体さ」

「そういえば兼一さん料理はお食べになりました？」

「うん全部食べたよ」

「な、何が美味しかったですか・・・」

「そうだな皆美味しかったけど、しいて言うなら肉じやがかな？」

「ほ、ほんとですか!？」

「う、うん出汁がよく染みてたよ」

(兼一さんに料理を誉めていただけなんて・・・)

(ガンバだぜまゆっち!!)

「これからは僕もこの寮でお世話になるから由紀江ちゃんも松風もよろしくね」

「は、はい」

「おうよ」

由紀江との話が終わり次に兼一に声をかけてきたのは寮に住む男性陣達だった。

「よ、兼一さん。ちゃんと食ってるか!!」

「うん、確か風間君だよ」

「おうよ」

「しかしモモ先輩を倒せる人間が居るとはな、驚きだぜ」

「まあ今回は僕の勝ちだったけど次はどうなるか」

「姉さん負けてどんな感じでした？」

「清々しい感じだったかな、何かを掴んだみたいだよ」

（あの姉さんに道を示せるほどの達人か・・・近づいておいて損はないな）

「兼一さん同じ寮に住んでる者同士、連絡先を交換しませんか？」

「うん、いいよ」

「なら俺も、ほら源さんも」

「ふん、まあ減るもんじゃないしな」

「はい、デレ頂きました!!」

「デレてねえ!!」

「どういう意味？」

「源さんはツンデレなのさ」

「直江、いい加減にしろよ・・・」

「げ、源さんマジで顔怖いよ・・・」

「まあまあ、源さんもツンデレでいいじゃねえか」

「風間は黙ってる!!」

「逃げろー!!」

「あ、待て直江!!」

「追いかけてっこか！負けないぜ!!」

忠勝をからかった大和は忠勝の一瞬の隙をついて逃げた。忠勝も

大和を追いかけ、そして翔一も二人を追いかけて部屋を出ていった。
「元気だな皆」

「アンタ良い体つきしてるね」

声のした後ろを見ると和服を着た、がたいのデカイ女性が仁王立ちしていた。

「貴女は？」

「アタシはこの寮の寮母の島津麗子さー!」

「そうでしたか。これからお世話になる白浜兼一です、よろしく願いします!!」

「アンタも中々元気が良いね、気に入ったよ。ああそうだ」

麗子は声のトーンを少し下げて兼一にだけ聞こえるように話した。

「鉄心さんから事情は聞いてるよ」

「では闇の事も・・・」

「ああ、ヤバイ武道家たちが川神の子達を狙ってるらしいね」

「ええ、でも安心してください。絶対にあの子達を闇になんかに渡させはしませんから」

兼一のその言葉と眼を見た麗子は安心感を覚えニツコリしながら言った。

「それを聞いて安心したよ、でもアンタもまだ若いんだほんとにヤバくなったらアタシたち大人を頼りな」

「はいありがとうございます、その時はよろしくお願いします」

そして兼一の歓迎会は夜遅くまで続いた、そして兼一は歓迎会が終わると麗子に自分の部屋に案内された、部屋に入ると兼一は今日あった武術家たちの事を考えていた。

(うーん百代さんだけかと思ったらこの島津寮の人たちも闇に狙われそうだな、特に椎名さん。彼女の抱えてるものは中々深そうだ)

兼一はそんな事を考えながら早朝の特訓に備えて眠りについた。

8話

兼一の朝は早い、例え寝る時間が遅くても日々の習慣が兼一を起すのであった、そしてまだ夜も明けてない寮の前で兼一はトレーニングのための準備運動をしていた。

「師匠たちがいないから、せっかく寝坊もできると思ってたのに、日々の習慣は恐ろしいなしかも投げられ地蔵やタイヤまで僕の寝てるうちに運ぶなんて」

寮の庭には昨日の夜アパチャイが運んだであろう投げられ地蔵が六体とタイヤが三本置かれていた、兼一はロードワークがてらタイヤに地蔵を乗せて走って川神大橋に向かった、ほどなくして橋に着くと兼一は六体の地蔵を自分にくくりつけ橋の真ん中まで行った、そして長いロープを取りだし片方のはしっこを鉄柵に結びもう片方を自分の足に結んだ、すると兼一は次の瞬間橋の上から飛び降り橋から宙吊りになった、ロープの長さは丸々兼一の顔が水に入るぐらいで腹筋背筋をしないと窒息してしまうようになっていた。

「最初この修行を見たときは、師匠たちはとうとう僕を殺そうかと思ってるんじゃないかと思ったよ（でもなれてる自分がいる、とうとう僕も異常な達人の仲間入りか・・・）」

兼一はそんな事を考えながら兼一はトレーニングを続けた、するとそれを遠くから見ているものたちがいた。

「あのバカが相変わらず人が見たら警察に通報されそうないかれた修行をしてやがるな」

「まあ岬越寺あたりがちゃんとメニューを組んでいるのだろう、あずみ手裏剣で縄を切ってやれ」

「実はアタイもそれやろうかなと思つて何個か投げてるんだけどアイツロープを揺らして躲してやがるんだよ」

「兼一めまた腕をあげたようだな、そろそろ行くぞ時間がないからな」
「分かった」

二人は兼一の前に向かった、そして兼一も手裏剣が投げられていた事に気づき修行を止めてロープを上り橋の上に上がった。

(さつき手裏剣が飛んできたけど殺気が無かったな、一応躲したけど)
兼一がそんな事を考えていると一人の小柄なメイドと筋骨粒々とした老執事が現れた。

「あずみさんにヒュームさん、お久しぶりです」

「白浜、てめえ相変わらず異常な修行してやがるな」

「久しぶりだな兼一よ」

「もしかしてさつきの手裏剣は？」

「アタイが投げたんだよ、何かムカついたからな」

「何故に!？」

「何となくだ」

「まったく何となくで投げないで下さいよ」

突如現れた二人、メイドの方は九鬼家従者部隊序列一位の忍足あずみそしてもう一人の執事は九鬼従者部隊の序列零番ヒュームヘルシングであった、二人とも前の任務で兼一とは面識があった、くだらない話を兼一とあずみがしているとヒュームが咳払いをして話を止めた。

「ところで鉄心から闇の動向は聞いたな」

「ええ聞きました、でもこの任務九鬼は何か関係あるんですか？」

「あの学園には英雄様と紋様が通われている、それに武士道プランの四人もいるしな、普段なら俺たち川神の人間で解決すべき問題なのが相手が闇だからな、闇と戦ったことのある梁山泊に相談すべきだと俺と鉄心で話し合ったのだ」

「そういうことでしたか」

「鉄心には隼人と友人だというので梁山泊への連絡を任せた、だが隼人たち達人が動けば闇に気づかれる可能性がある、だから達人に成り立てのお前が選ばれたと言うわけだ、そして俺たち九鬼はある人物に連絡を取ることにしたのだ」

「ある人物？」

「俺様の事だよ親友」

その声は兼一の耳元から囁くように聞こえた、驚いた兼一が後ろを振り向くとそこには見知った男が立っていた。

「に、新島!?!何でお前がここに、確かアメリカの大統領の弱味を探ってくるとか言って渡米したのに」

「久しぶりだな兼一」

「流石の宇宙人もアメリカの大統領までは行き着けなかったか?」

兼一がニヤニヤしながら言うのと新島は耳をほじりながらつまらなそうな顔をして答えた。

「ああ、あれね、アメリカに渡って三日ぐらいで掴んだよ
「!?!」

「これでアメリカも俺様のもの♪、ひやははははは」

「もうとうとう人間味が無くなってきたな宇宙人め」

「何だ?どんな弱味か聞きたいか、特別に教えやっても良いぞ」

「恐ろしすぎて聞きたくない」

「アイツも普通じゃねえが友達も異常者だな」

「だからあの男を呼んだのだあずみよ」

新島は一通り兼一をからかうとヒュームの方を向いた。

「ヒュームさんよ俺様までここに呼んだのはどういう事だ?」

「分からののか?貴様の読みも大したことはないな」

「まあ兼一一人じゃこの川神を守るには広すぎるからな、俺様を呼んで他の新白の奴等と呼ぼうとか言う腹なんだろ?」

「武田さん達を?(川神には武術家がかなりいた、確かに僕だけでは手が回らないかもしれないな)」

「分かっているではないか」

「その前に」

新島はまた兼一の方に振り返り真面目な顔で兼一に尋ねた。

「兼一今回の闇との戦いは前の九遠の落日よりもヤバイものになりそうだ、おれのセンサーがヤバイと言ってる、お前はどのような気なんだ?」

「昨日僕は色んな川神の武術家たちに会った、どの人たちも心に小さくない闇を抱えている、そしてその大半は僕等よりも年下の子達だ、あの子達を闇に堕とさせたりはしない!!」

兼一の目を見た新島は不適な笑みを浮かべるとヒュームの方に再

度振り返った。

「ヒュームさんよ、俺様もあの学園に通えるようにしてくれ」

「新島!？」

「お前に言われずとも鉄心と相談しお前や他の仲間達の学園潜入の手筈は整えてある」

「流石は世界の九鬼だ、今度帝社長に会ってみたいもんだな」

「帝様もお前には会ってみたいと言っていた」

「話が合いそうだな」

二人がそんな話をしていると橋に日が射し朝がやって来た。

「もう朝だな、とりあえず今日から白浜と新島は学園に通うことができるようになってる、学園に行ったら二人とも鉄心の所に向かえ後は鉄心が何とかしてくれるだろう、それと新島貴様と他の仲間たち全員の生活は九鬼極東本部が面倒を見る」

「太っ腹な事で」

「そろそろ主たちが目を覚ます時間だ我々はこれで帰る」

「じゃあな兼一」

「ヒュームさんあずみさんもありがとうございました」

ヒュームとあずみは振り返らずにその場を去った。

「これから大変だな兼一」

「ああでも思い出さないか？高校時代を」

「まあな」

懐かしい日々を思い出しながら二人は上る朝日を見ていた、そして兼一は島津寮に新島はとりあえず九鬼家本部へと帰っていった。

9話

兼一が帰ると寮ではちやうど朝御飯の時間になっていた、兼一はトレーニングの汗を手早くシャワーで流し皆と朝食をとって風間ファミリーの面々と一緒に登校した、そして登校途中に残り二人の風間ファミリーの面子と兼一は出会った。

「お、アンタがあのお小説の作者の白浜兼一さんか？」

「ほんとにいたんだね」

「川神では僕の小説を色んな人が読んでくれてるな」

「まあ川神は武術が盛んですから、兼一さんの小説は武術やってる奴なら読んでると思いますよ」

「ほ、ほんとに!?大和君」

「ええ」

「と、自己紹介がまだだったな、俺様は島津岳人特技はこの筋肉をいかけたパワーだぜ!!」

「島津って言うど麗子さんは・・・」

「ああ母ちゃんだ」

「そうなんだよろしくね」

「次に僕は師岡卓也モロで良いですよ、よろしく、他のメンバーと違って武術はやってないけど僕もあの小説は面白いから読んでますよ、でもほんとにあんな修行をしてたんですか？」

「皆に聞かれるけど脚色は一切してないからね、自分でもよく生きてたと思うよ」

「ほんとだったんだ・・・」

新たに加わった岳人とモロを加え一同は川神大橋に差し掛かった、そして橋の入り口では義経たちクローン組が待っていた。

「あ、お兄ちゃん!!」

「やっと来たね」

「ふ、やはり俺と兄貴は引き合う定めか・・・」

「スイスイ号あれが兼一さんだよ」

「白浜兼一、インプットしました清楚」

清楚は自分の愛用している九鬼特製の人工知能を搭載したスイスイ号に兼一を紹介した、そして兼一たちは義経たちを加え一緒に登校した、だが何故か義経たちが合流してから岳人の眼差しが兼一の身体には突き刺さっていた。

(な、なんだろ岳人君の視線が痛い、僕何か悪いことしたかな?)

(くそー兼一さん顔が良いと思ったら案の定俺の義経ちゃんをく)

(やれやれ岳人も懲りないねく)

皆は談笑しながら歩いていたら、川神大橋の真ん中に来ると後ろから単車が近づいて来る音がした、そして次の瞬間単車に乗っていた男が義経のバックを引ったくって行った。

「あ!?!義経の鞆が!!」

「怪我はない?義経!」

「大丈夫!?!義経ちゃん!」

「与一」

「分かったよ」

皆が義経の心配をしている中弁慶のドスの効いた声に反応し与一は自分の武器である弓矢を取り出した、すると与一の後ろから一本の腕が伸びてきて与一の攻撃を邪魔した。

「誰だ!!」

「余計なこととはしなくて良い、アイツに任せておけ」

「ア、アンタは?」

「そんな事よりあっちを見てみな」

与一の事を止めたのは新島だった、そして新島は単車の方を指差し皆もその方向を見た、その時単車の男は義経のバックを引ったくった事に成功したので浮かれていた。

「やったぜ九鬼のクローンのバックだ金もたんまり入ってるだろ、しかも追ってくる気配もない俺は運が良いぜ」

単車の男がそんな事を考えていると進行方向に兼一が立っているのが見えた。

「退きやがれ!!引き殺すぞ」

「最初に言っておきます、義経ちゃんのバックを返してください」

「引ったくりがハイそうですか、引ったくったものを返すと思うのか？、このままてめえを引き殺してやる」

単車の男はスピードを上げて兼一を引き殺そうとした、義経たちも兼一の身を案じ逃げるように叫んだ、だがとうの兼一は逃げる気配さえも見せず単車が近づいて来るのを待っていた。

「死ねー!!」

そして単車が兼一の目の前に来たとき兼一は足元にあるマンホールに足の指を引っかけ単車に自分の腕を伸ばし単車を掴んだ。

「少し痛い目にあってもいいです、単車投げ!!」

兼一は単車を掴むと引ったくり犯ごと単車を投げ飛ばした、それを見ていた風間ファミリーのメンバーや義経たちは驚きを隠せずにした、だが新島だけはニヤニヤした顔でその光景を見ていた、皆がその光景に固まっていると大和たちの後ろから百代とその妹の川神一子がやって来た。

「ワン子に姉さん・・・」

「まさか単車ごとあんな綺麗に投げるとはな、流石は達人だな」

「す、凄いわ」

大和たちは単車を投げ飛ばした兼一に驚き固まっていた、兼一は引ったくり犯が生きていたことを遠目で確認すると皆の元に戻ってきた。

「皆取り返したよ」

「驚いたな」

「うん、人間技とは思えないね」

「流石は兼一さんです」

「お姉さまが言った通りの達人ね!!」

「兼一さん面白れー!!」

「俺様の筋肉を持つてしてもあれはできねえな」

「モモ先輩以外にあんなことができる人が居るなんて・・・」

「姉さんあれ出来る？」

「投げることぐらいは簡単だがあんな綺麗には投げられないな、しかも運転手が死なないように加減もされなおかつ義経ちゃんのバック

も引ったくりかえしているしな」

兼一は皆の元まで戻ると義経にバツクを返した。

「お、お兄ちゃん・・・」

「多分大丈夫だろうけど無くなったものが無いかどうか確認した方がいいよ」

「う、うん・・・大丈夫そうだからありがとうお兄ちゃん」

「それはよかった」

「兼兄ありがとうね」

「あんなことができるとはな」

「す、凄いね」

「あんなの兼一にしてみれば大したことはない」

「何だ新島来てたのか」

「お前段々行動がああ師匠たちに似てきたぞ」

「気を付けているんだけど、こういう時は身体が勝手に反応しちゃうんだよ」

新島は兼一の肩を叩いて労を労った、そして皆の興味は新島に向いた。

「兼一さんその人は？」

「あ、百代ちゃんおはよう、隣に居るのが一子さんかな？」

「は、はい川神一子です!!」

（なるほど釈迦堂さんが言ってた通りの子だな、でも僕よりは才能がありそうだ）

「で兼一さんその隣の人は誰なんですか？」

「ああごめん、こいつは僕の悪友で新島春男って言うんだ」

「新白連合総督新島春男様だよろしくな!!」

「この人があの小説に出ていた宇宙人か・・・」

「そうその宇宙人だよ」

「貴様俺様の紹介を宇宙人の一言で片付けるな!!」

「うるさい宇宙人、さあ皆こんなところでぐずぐずしていると学園に遅刻しちゃうよ!!」

「ヤバツ!?ほんとに遅刻するぞ皆急げ」

大和の言葉に兼一たちは学園に向かって走っていった。

10話

走って遅刻する前に学園に着いた兼一と新島は風間ファミリーやクローン組と別れて鉄心の待つ学長室にやって来た、そこには鉄心の他にジャージを着た男が待っていた。

「失礼します」

「ちわーす」

「フムやって来たな」

「この子が百代を倒した兼一君ですか」

「は、はい白浜兼一です（この人中々強そうだ）」

「私は川神院で師範代をしているルー・リーだよ」

「ルー・・・あ!?!馬師父の元お弟子さんが川神院で師範代をやってるって言ってたのは（師範代、道理で強そうな訳だ）」

「私の事だよ、馬先生懐かしいネまさかこんな形で弟弟子に会えるとは思わなかったけどネ」

ルーは兼一と会えた事をとて嬉しそうだった、それを鉄心の咳払いが割り込んだ。

「ルーよ今はホームルームまで時間がない、話を進めるぞい」

「すいません学長」

「兼一君と新島君、君たちには二年のクラスに編入してもらおう、二人いるので二つのクラスに編入させようと思うが良いかの?」

「はい」

「ああ」

「さて二人をどのクラスに編入するかじゃが」

「あのくひとつだけお願いが」

「ん?なんじゃ」

「川神一子さんと同じクラスになれませんか?」

「ほう、一子と同じクラスというとFクラスか、じゃが何故じゃ?」

「ある人に言われたんです一子さんに目をかけてほしいと、この川神は学力によってクラス分けをしているのは知っています、ですが僕をFクラスに入れてもらえませんか?」

兼一は鉄心に向かつて大きく頭を下げ、頼んだ、釈迦堂との約束を守るために。

「兼一君頭をあげてくれ、梁山泊に手伝ってくれと依頼したのはワシじゃお主たちの希望には出来るだけ答えたいと思う、それはそうと誰じゃそれを言ったのは？」

「昨日川神院で勝負をした後僕は釈迦堂という人と戦いました、その人に一子さんを見てくれと言われたんです」

「!？」

ルーと鉄心は驚いた、釈迦堂は師範代の頃は自分と同じく才能の塊である百代を可愛がっていた、確かに一子にもそれなりに目をかけていたが、釈迦堂の性格からそんな事を人に頼むとは二人は思いもよらなかったからである。

「釈迦堂・・・変わろうとしているんだネ」

「ええ僕もそう思います、だから頼みを聞くことにしたんです」

「ならワシからもお願いする、あの子は武術の才能は無いがひたむきで芯の強い良い子じゃ、お主と関わればあの子も百代と同じように何かを掴めるかもしれん、一子をよろしくお願いします」

「今一子の修行を見ている私からもお願いするヨ」

鉄心とルーは兼一に一子を託すことを決め頭を下げて頼んだ。

「どこまで出来るか分かりませんが精一杯努力します」

鉄心とルーは確信していた兼一ならば一子に何かをもたらし得ると。

「おーい、俺様を無視しないでもらいたいね」

「おお、すまんのおお主が九鬼が呼んだ新島君じゃな？」

「ああ、川神鉄心さん」

「ワシの事も調べはついておるか、抜け目ない男よ」

「では私は小島先生と宇佐美先生を呼んできます」

「頼む」

「新島君お主は勉学は大丈夫かの？」

「ああ、高校時代は大したこと無かったが今はそれなりにやれると思
うぜ」

「それはよかった、中間や期末で悪い点を取ればいかにワシでもお主をS組に残すことは出来んからのう」

「なら俺がS組で兼一がF組って事だな？」

「そうなるのう」

「それで大丈夫か新島？」

「まあひとつお前への貸しにしておくさ兼一」

「とんでもない奴に貸しを作ってしまった」

兼一が身震いしていると学長室のドアを叩く音が聞こえた。

「宇佐美です」

「小島です」

「二人とも入ってくれ」

「失礼します」

「新島君、兼一君、紹介しようまず男の方がS組担任の宇佐美巨人君として残る女性がF組担任の小島梅子君じゃ、宇佐美先生、小島先生、この二人は新島春男君に白浜兼一君じゃ例の闇の件でこの二人には来てもらった」

教師の二人は闇の言葉を聞くと少し顔をしかめた。

「じゃあこの二人が例の達人という事ですか」

「俺様は違うけどな」

「確かに一人は凄い闘気だ、もう一人は闘気ではなく何かえたいの知れないものを感じる」

「お二人はもう闇の事はお聞きなんですか？」

「ああ、なんと言っても闇が狙ってるっていうのはおじさんが仕入れてきた情報だからね」

「教師の貴方がどうやって？」

「おじさんは宇佐美代行業って言う何でも屋をやっていてね、とある仕事で闇がうちを狙ってる事を聞いて学長に報告したって訳だ」

「なるほど」

「ところで学長私たちを呼んだ理由は、そろそろホームルームが始まるのですが」

「おおすまんな小島君、この二人を君たちのクラスに編入させる兼一

君はFクラスに新島君はSクラスにな」

「潜伏してもらおうんですね？」

「そうじゃ宇佐美先生、小島先生もそれで良いかの？」

「かまいません」

「よろしくお願いします小島先生」

「すまない・・・」

「え？」

突然の梅子の言葉に兼一は謝られた理由が分からなかった。

「生徒たちを狙う闇の武道家たち、本当は私たち教師が生徒たちを守らねばならないのに君たちに頼ってしまうなんて情けない」

「小島先生・・・闇の事は前に戦った僕たちが一番よく分かっています、安心してください生徒の皆は僕たちが必ず守ります、活人拳の誇りにかけて」

「白浜・・・ああよろしく頼むぞ、私もできる限りの協力はする」

兼一と梅子は固く握手をした、それを新島と巨人はただ見ていた。

「生徒を心配する小島先生良いなあ」

「アンタあの先生が好きなんだな」

「ああ、おじさんが猛アピールしても振り向いてはくれないがな」

「なら俺様が仲を取り持ってやろうか？」

「嬉しい提案だな、で俺は何をすれば良いんだ？」

「流石は代行業をやってるだけあって話が早い、アンタは川神の裏に顔が利きそうだから俺様の情報収集の役に立ってもらうだけだよ」

「まあおじさんもできる限りの事はするけどね、それにしても抜け目ないね君は」

兼一とは違う形で新島も巨人となにか通じるものを感じていた、そして兼一と新島は二人の教師に連れられて自分の教室へと向かった。

11話

新島は宇佐美先生に連れられSクラスへ、兼一は小島先生に連れられてFクラスへと向かった。

兼一がFクラスの前まで来ると教室の中から騒ぎ声が漏れていた、小島先生は兼一が入る前に生徒たちを落ち着かせるため先にクラスに入った。

「静かにしろ!!」

小島先生の一喝でクラスの騒いでいた生徒たちが静まっていった。「知っているものもいると思うがこの学園に編入生が二人入った、そしてそのうちの一人は私のクラスで受け持つ事になった、皆も仲良くしてやってくれ、入って良いぞ」

兼一はドアを開けた、そこには朝登校した時一緒だった風間翔一 島津岳人 師岡卓也 直江大和 源忠勝 クリステイアーネフリードリヒ 川神一子の姿があった。

「白浜兼一です、理由があり皆さんよりも少し歳は上ですが、もう一度学園に通い勉強することになりました、歳上とは思わず気軽に話しかけてくれると嬉しいです、これからよろしくお願いします!!」

兼一の自己紹介が終わると拍手をするものや転入生が男という事で落ち込むもの等受け取りかたは色々だった。

新島の方はとゆうと巨人からSクラスにはどんな生徒たちがいるのか早速情報収集を始めた。

「まあそんなとこだな目立つ奴等は」

「なるほど不死川家の令嬢に九鬼家の長男、川神にある大病院の息子それにドイツ軍で有名な猟犬部隊のリーダーそしてクローンたちか、アンタよくこんな濃い面子の先生やってんな(やはりこのオヤジもタダ者じゃねえって事か)」

「まあこの面子なら仮に問題が起きてもおじさんが頑張るまでもなくコイツ等だけで解決しちゃうからな、たいしたことはねえよ」

そんな話をしていると二人はS組の教室の前に着いた、クラスの中ではF組ほどではないが少し騒がしかった、すると巨人も新島に静か

にさせるから後から来るようにと言い廊下で待たせた。

(流石に頭の良い奴等を集めたクラスだな先生が入るだけで静かになりやがった、これは人心掌握もチョロいかもしれねえな)

そして程なくして巨人から呼ばれると新島は教室に入ってしまった。

「転入生の新島春男様だ、まあそれなりによろしくしてくれ」

生徒たちは新島を見て人外の生物だと思ったり、自己紹介の態度を見て生意気な奴だと思ったり、兼一とは違いあまり印象は良くなかった、そして授業が終わり昼休みに入るとF組の兼一の机には人だかりができていた、すると一子が兼一に挨拶しようとして近づいてきた。

「兼一さん朝はちゃんと挨拶ができなくて、アタシは川神一子って言います!!」

「改めてよろしくね川神さん」

「一子でいいわ、川神はお姉さまやお祖父様もだし」

「分かったよ、よろしくね一子さん」

「は、はい!!」

一子と挨拶していると一子の身体が少し震えているのが兼一には見てとれた。

「一子さんなにか僕に言いたいことがあるの?」

「え!?!」

「何か我慢してるみたいだから」

「実は私お姉さまから昨日兼一さんの話を聞いたんですけど、お姉さまを倒したんですよね?」

「うん」

「お願いがあります・・・私と決闘してくれませんか?」

「決闘・・・」

この川神学園では生徒たちの自主性を尊重するために決闘とゆうシステムを導入していた、それは決闘するもの同士が合意すれば人数そして闘う方法も自由に決められるというものである。

「決闘のシステムは教室に来る前に鉄心さんに聞いた、僕は構わないよ確か種目も決められるんだよね?」

「ええ」

「種目は一子ちゃんが決めていいよ」

「なら武器有りの試合でお願いします!!」

「へえ、一子ちゃんは武器を使うんだね」

「薙刀です」

(こりやまた応用のきく武器だな)

こうしてF組では一子が兼一に決闘を挑んでいた、その頃新島のいるSクラスでは新島の机に着物を着た女の子がちよっかいをかけていた。

「ニヨホホホホ、これその宇宙人」

「何だお前は？」

「妾の名は不死川心じや」

(コイツが不死川財閥の娘か、あのヒゲ先生の情報通りの奴だな、俺様の手駒にしておけばうまく利用できる)

「これはこれは新島春男です、天下の不死川財閥のご令嬢に声かけていただけるなんて光栄です、これからもよろしくお願いします」

「ニヨホホホホ、妾を存分に頼るが良いぞ(なんじや？自己紹介の時とはやけに印象の違う奴じや、まあ悪い気はせんとう)」

(やはりチョロいな、こういう自尊心の高い奴はおだてに弱い)

心は上機嫌で自分の席に帰っていった、次に来たのはハゲと日焼けをしたイケメンだった。

「不死川への扱いがうめえな」

「中々の人心掌握ですね」

「ハゲとイケメンか、やけに濃い面子が来たな」

「これは失礼、私は葵冬馬です」

「小さい子達のガーディアンの井上準だ」

「ああ、葵紋病院の跡取りって言うのはアンタか、ところで小さい子達のガーディアンつうのはどういう意味だ？」

「それはね〜」

「!？」

準の言葉に引っ掛かった新島が訪ねると、新島の後ろから突然長髪の白い髪の女の子が突然現れた。

(俺様のセンサーに反応しないとはなヤベー感じだなこの子は)

「大丈夫？驚いちやった？」

「いや大丈夫だ、ところでさっきの質問の答えを教えてください」

「簡単だよ準はロリコンハゲなのだ」

「コラ雪!!人聞きの悪いことを言うな、俺は小さい子を愛して止まないだけだ」

「ロリコンでハゲか中々業が深そうだな、ところでお嬢さんは誰だ？」

「ウエーイ榊原小雪だよ」

「新島だよろしくな」

新島は着々と情報収集をしていた、それを遠くから見ている二人がいた、一人は額にバツ印の傷がある九鬼家の長男でもある九鬼英雄、もう一人は彼の専属メイドの忍足あずみだった。

「新島様は着々と情報収集をしていますね英雄様!!」

「うむ大した策略家よ、新白の宇宙人の異名は伊達ではないな、それにしてもあずみよ校庭の方が騒がしいな」

「そうですね、英雄様の憩いの時間を邪魔するならあの騒音消してきましようか?」

「まあ見てから決めよう」

校庭が騒がしくなってきたことに英雄が気づくと、他のクラスメイトや新島も気づき席を立てて窓に近づき校庭を見下ろした、そこには薙刀を構えた一子と胴着を着た兼一が立っていた。

12話

校庭で兼一と一子が対峙してるのを見て英雄は正直驚いていた。

「け、兼一殿!?!、まさか一子殿と闘うことになるとは……」

「英雄様……」

英雄は一子を愛しており兼一の実力も知っていた、英雄はこれまで何度も一子にプロポーズしていたが一子本人が英雄を尊敬してはいるが英雄を恋人としては見られないとプロポーズを断り続けていた、そしてあずみも英雄の事を愛していた、だがどうの英雄はあずみとの絆を主従の絆としてしか見ておらず二人とも叶わぬ恋をしていた。

校庭では兼一と一子の決闘を見ようと風間ファミリーのメンバーが見物していた。

「どう思う?」

「ワン子には悪いけど今回は勝てないと思う、相手はモモ先輩を触れずに倒すぐらいだし」

「ふむ、だが犬も兼一殿と実力の差が違うのは百も承知だろ、恐らく犬は知りたいんだろう、自分のたどり着きたい場所の距離を」

「キヤップ止めた方が良いんじゃない?」

「安心しろモロ、兼一さんは何か考えてるみたいだぜ」

「まあワン子が決めたことだから俺様たちが口は出せないだろ」

「源さんは止めなくても良いの?」

「あれはアイツの戦いだ俺の出る幕はねえよ」

風間ファミリーは各々に一子の事を心配していた、そして翔一の予想通り兼一はあることを考えて一子の決闘を受けていた。

「この決闘の見届け人はこのワシ川神鉄心が勤める、そしてこれは武器有りの決闘じゃ、色々な武器のレプリカを持ってきた、双方好きなものを選ぶとよい」

一子は自分の使う薙刀のレプリカを選び、兼一の武器は己の拳なので武器を選ぶのを拒否した、そして二人はある程度距離をとり何時でも闘えるように拳と武器を構えた。

(お姉さまがお爺様以外に負けた事はなかった、私も武人としてこの

人に挑んでみたい、それに良い機会だし・・・)

(凄い闘志だ、才能がない僕と同じで血の滲む特訓をしてきたのがよく分かる)

「双方とも悔いのない戦いをするのじゃ、始め!!」

鉄心の合図と同時に動いたのは一子だった、兼一は一子の出方をうかがうため待ち構えた。

「一瞬十七撃!!」

(素早い攻撃だ、やはり一子さんはスピードを重視して闘うタイプだな)

一子の素早い連続蹴りが炸裂した、たいして兼一は腕をコロのように回して一子の攻撃を全て捌いていた、S組の教室では英雄が兼一と一子の戦いを見ていた。

「化勁か・・・」

「流石英雄様ご存じなのですね」

「我も中国拳法を学んでいるからな」

「化勁とは腕をコロのように回し相手の攻撃を反らし威力を無効化する中国拳法独自の技ですね」

ところ変わり校庭で見ている風間ファミリーのメンバーも一子の攻撃がいなされてる事に驚いていた。

「じゃあその化勁で一子の足技が無効化されてんのか?」

「うん、でもワン子の素早い足技を全部化勁で反らすなんて、普通はできな」

翔一の疑問に京が答えていると大和の拳が強く握られているのに京は気づいていた。

(大和、ワン子の事が心配なんだね)

とうの一子は全ての足技が無効化されると兼一から少し距離をとり薙刀を構えた。

(まさかあんな形で私の技を反らすなんて、お姉さまを倒したのは伊達じゃないわね、なら!!)

一子は薙刀を回しながら兼一に向かって突進した。
(なるほど薙刀を回し勢いをつけて攻撃する気か)

「川神流 大車輪!!」

一子は兼一の目の前まで近づくと回転の勢いを利用して斬り上げを放った。

「あまい!!」

兼一は一子の攻撃を見切り躲すだけではなく一子の腕を掴んだ。

「四方投げ!!」

兼一は腕を絡めて一子を投げ飛ばした、投げ飛ばされた一子は校舎に向かって飛ばされた。

(くっ!?大車輪でもダメなの?、でも諦めないわ!!)

一子は校舎にぶつかる寸前に薙刀の柄を校舎の壁に突き薙刀の棒の部分をバネのようにしならせた、一子はそのバネを利用し兼一に向かって再度突撃した。

(薙刀をそんな使い方するとは、でも突撃してくるのは想定通りだ!!)

兼一は構えを解かず一子を待ち受けた。

(何かする気ね、でももう何があるかと止まらない)

「川神流 水穿ち!!」

一子は兼一に近づきながら薙刀を横に振りかぶった、そしてすれ違い様に兼一に向かって斬りつけた、だが兼一はまるで斬る場所が分かっていたかのように完璧に躲してみせた、そして兼一は一子が自分に飛び込む寸前に片足を引いて掌を一子のお腹の来る位置に突き出した。

「!?」

「退歩掌破」

一子は自分から兼一の掌に突っ込み自分で腹に掌底を入れてしまった、新島はそれを教室から見ている少し違和感を覚えた。

(兼一の奴珍しいな女相手にマジになるなんて)

そしてとうの兼一は勝負が始まる前教室で一子の眼を見て流水制空圏を発動し一子の心を見ていた、そして兼一は一子があることを覚悟し兼一に勝負を挑んできていることを知っていた。

(本気で向かってくる人に手を抜くのは失礼だ)

(アタシには届かないの?・・・)

「・・・勝者白浜兼、!?!」

一子が意識を手放したのを見た鉄心は兼一の名前を告げようとしたその時、一子はふらふらになりながらも立ち上がった、そしてそれを見ていたファミリー全員が一子に声援を贈った、そして教室にいた英雄も校庭に降り応援に加わった。

「頑張れーワン子!!」

「相手が達人だからって負けんなワン子!!」

「一子諦めんな!!」

「ワン子お前はこんなもんじゃないだろ!!」

「ワン子頑張って!!」

「こんなところで負けるな犬!!」

「頑張るのだ一子殿!!」

皆の声援が一子に届いたのか一子は立ち上がり何かを呟き始めた。

「ひ、光灯る街に背を向け、我が歩は果て無き荒野、奇跡もなく標もなく、ただ夜が広がるのみ、揺るぎない意志を糧にして、闇の旅を進んでいく、勇、往、邁、進!!」

（何かの詩かな始めて聞く、でも何故だろ力が込み上げてくるものがあるな）

川神魂を掲げ一子は闘志の炎を燃やし兼一を真っ直ぐ見据えた、兼

一は少し一子から距離をとり拳を構えた。

（次の技で最後、全力の顎を食らわせてやるわ）

（一子さんのあの身体では次で終わりだな、一子さんを最低限のダメージで終わらせるにはあれしかないな）

「川神流 奥義 顎!!」

次の瞬間一子は全力で兼一に向かって突撃した、そして兼一の懐に入ると兼一に向かって素早い斬り上げ放った、兼一は流水状態でそれを躲すとすぐに薙刀の斬り落としが兼一を襲おうとした。

「白刃流し!!」

兼一は腕を捻りながら薙刀の棒の部分の側面に拳を捻り上げ薙刀を払った、本来の白刃流しはこのまま相手に拳を叩き込むが、兼一は拳を開いて掌底を一子の腹に当てた。

「浸透勁!!」

掌底が一子の腹に当たると衝撃が一子の身体を駆け巡り一子は倒れた。

(アタシじゃ届かなかった・・・)

「勝者白浜兼一!!」

鉄心は一子が意識を完全に手放したのを確認し勝者の名前を告げた、そして決闘が終わると風間ファミリーのメンバーは一子に近寄った。

「大丈夫かワン子!!」

「しっかりしろワン子!!」

「保健室に連れていこう」

一子は保健室に連れていかれ兼一もそれについていった、そして保健室に一子が着き先生が身体を治療するために男性陣を外に出した。

「兼一さんやりすぎなんじゃ」

「大和君ごめん、でも一子さんの本気に答えたかったんだ」

「まあ今回ワン子の眼は何時も以上に本気だったからな」

「うん、僕たちも怖いくらいだったよね」

すると廊下を走る音が聞こえてきた、音のする方を見ると百代が走ってきた。

「ワン子は無事か!?!」

「今中で治療してるよ」

大和の言葉に黙って頷くと百代は保健室に入ってしまった、そして少しの間沈黙が男性陣の中に流れた、すると保健室の先生から入室許可が出て兼一たちは中に入った、中に入ると一子はベットで寝息を立てていたそれを見た男性陣はホツとした。

「先生の話ではたいした怪我はしていないらしい、兼一さんが加減したからだろう」

「ねえ兼一さん」

「何、椎名さん?」

「貴方は確か女性に手を上げないって本には書いてあったけど何でワン子と戦ったの?」

「一子さんは大事なものをかけて勝負を挑んできた、その覚悟に真剣に向き合わないのは失礼だと思ったから受けたんだ」

「何だよその大事なものって？」

「それは・・・僕からは言えないよ風間君」

「う、ううん・・・」

そんな話をしていると一子が目を覚まし辺りを見回した。

「ここは保健室？、アタシ負けたのね・・・」

「ワン子良くやったよ、相手はモモ先輩を倒しちゃうような人なのに」

「それは関係ないわモロ、アタシは負けた、ただそれだけよ」

「どうしたんだ犬、いつものお前らしくないぞ？」

「そんな事ないわ、ねえ皆お願い兼一さんと話がしたいの」

「分かった、ほら皆教室に戻るぞ」

百代は一子の頼みを聞き皆を外に追い出した、そして兼一とすれ違い様に兼一にだけ聞こえるように妹を頼むと言い残した、兼一も頷いて答え保健室の中は兼一と一子だけになり、兼一は一子の隣にあった椅子に腰を掛けた。

「僕に話したいことがあるんだね一子さん」

「ええ、お姉さまから兼一さんの事を聞いて信じられなかったわ、あの強いお姉さまが一撃も当てられない人がいるなんて、でももしアタシがまぐれでも一撃当てられればまだ可能性はあると思ってた・・・」

「可能性？」

「アタシの夢は川神院の師範代になること師範代になってお姉さまを支える事が夢なの、でもアタシにはお姉さまと違って武術の才能はない、正直私を教えるルー先生も何処かでアタシは師範代にはなれないと思ってる、でもお姉さまが一撃も当てられなかった兼一さんに一撃でも当たればまだ師範代になる可能性があると思ったの」

すると一子の目から大粒の涙が流れ出した、そして涙を流しながらも言葉を続けた。

「これでアタシの武術家としての道も終わってしまった」

兼一は一子の言葉を黙って聞いていた、そして一子の話が終わると今度は兼一が話し出した。

「一子さんの気持ちは良く分かります」

「え？」

「僕には六人の師匠たちがいるんだけど皆が口を揃えて言うことがあるんだ、何だか分かる？」

一子は首を横に降る、すると兼一は笑いながら話を続けた。

「僕には武術の才能はない」

「そんなに強いのに？」

「僕は昔いじめられっ子でね、高校時代にある人に会ってそれをきっかけに武術を始めたんだ、でも僕は一子さん以上に才能がなかったからね、人の何千倍もキツイ修行をしなくちゃ達人にはなれなかった、僕の師匠の言った言葉があるんだけど、この世に才能のある人はたくさんいるけどその全ての人が大成するかと言えばそうじゃない、でも技を極めた達人に共通するものがひとつだけあるんだ」

「そ、それは何？」

「信念だよ、僕にはそれがあから師匠たちは諦めずに僕を鍛えてくれた、良い師弟関係というのは弟子が師を信じ師が弟子を信じる、そして共に成長していくものだと思おう」

一子は兼一の話聞いて正直羨ましかった、自分を信じそして自分も信じる事の出来る師がいることが。

「ところでほんとに良いの？」

「え？」

「武術家の夢を諦めても」

「……」

「僕は一子さんの中にも揺るぎない信念があると思うよ」

「アタシは・・・強くなりたい!!」

「一子さんどうだろう僕の弟子になってみない？」

「え？」

「本来なら僕から言うのは可笑しいんだけど、どうだろう？」

「アタシでも強くなれるかな・・・」

「それは一子さん次第だよ、それと自分の可能性を諦めちゃダメだ、諦めなければ百代さんにだって勝てるようになる」

「お姉さまに・・・」

兼一の言葉に一子は胸を打たれた、すると今まで元気の無かった一子が兼一の眼を見て答えた。

「アタシいつのまにかお姉さまには絶対敵わないと思ってた、だからお姉さまの横に立てないならすぐ近くにいれる師範代になろうと思ったの、でも出来ればアタシもお姉さまと同じ場所に立っていたい!!」

「じゃあ」

「よろしくお願いします師匠」

ここに新たな師弟が生まれた、そして保健室の外で壁にもたれながらその話を聞いているものが一人。

「やれやれ、才能の無いものどうし引き合うのかね?、まあ面白くなってきたけどな、ひやはははは!!」

話を聞いていた新島はこれから起きる出来事を思い浮かべ笑いながら自分の教室に戻っていった。

13話

保健室での兼一と一子のやりとりを聞いた新島はその後クラスに戻り授業を受けた、そして一日の授業が終わり放課後新島は帰りの支度を始めていた、すると新島の目の前に軍服を着た赤い髪の眼帯をつけた女性が立った。

「マルギツテエーベルバツハ、クリステイアーネフリードリヒと同時に転入、転入理由は父親のフランクフリードリヒ中将与アンタがクリスが遠く離れた日本で暮らすのは心配だったため、着けている眼帯は目に疾患があるわけじゃなく自身の強さを抑えるハンデ、外せば戦場で恐れられた猟犬が顔を出す、因みに始めて日本に来た時川神百代とは対戦するなという命令を無視し一度川神百代と対戦、しかし眼帯を外しても敵わなかった、こんなところかな今のアンタのデータはマルギツテさんよ」

「そこまで調べているとは、やはり貴方は油断なりませんね」

「情報収集は俺様の得意分野でね、油断がならないならどうするんだい、まさか決闘とか」

「ええ、私が勝ったら学園から出ていってもらいます」

「悪いが俺様は利のない戦いはしない、それに俺自身も戦えないしな、だが」

「だが何です?」

「その勝負俺様の忠実な僕が相手をするのと、勝ったらアンタが俺様の言うことを聞いてくれるなら受けても良いぜ」

「良いでしょう、貴方の僕が勝てば言うことを聞きましょう」

「決まりだな、なら・・・」

新島は腕時計に眼を落とすと良い時間だと良いながらマルギツテを校庭に連れ出した。

「そろそろだな」

「何がですか?」

新島が空を指差すと学園の上空に一台のヘリがやって来た、そして次の瞬間誰かが飛び降りたのがマルギツテの眼には見えた。

「なっ!？」

驚いたマルギツテは落ちてくる人影を見つめていた、突然の飛び降りにも驚いたがマルギツテが一番驚いたのはその人物はパラシュートを着けてないことだった、程なくしてその人物は地面に落ちそして受け身を取りながら新島の前まで転がった。

「だ、大丈夫なんですか？」

「ん？コイツの事か？、この程度高さならコイツなら無傷で着地出来て当たり前だ、なあジークよ」

新島の言葉に倒れていたジークはむくりと起き上がり、そして新島に膝をついた。

「無論です、我が親愛なる魔王よ」

そしてジークは自分の身体についている砂を払いながら立ち上がった。

「ところで総督ご用はなんでしよう？」

「お前を呼んだ用とは別にまずはそこにいる奴と戦ってくれ」

「分かりました」

ジークはくるとマルギツテの方を向きマルギツテに近寄った。

「私の名前は九弦院響、通称ジークフリートと申します、ジークと呼んでください」

「マルギツテエーベルバッハです」

「なるほど」

「何がなるほど何ですか？」

「お名前からしてドイツの方ですね、そして軍人、ですか」

「臆しましたか？」

「いえ、総督に刃向かうものは例え神であろうとも私が叩きのめします」

「面白い!!」

マルギツテは強者であるジークと戦えることにうち震えていた。

「そうだマルギツテよ、ジークはまだこの生徒じゃねえからこれは決闘じゃない、だからこの勝負の見届け人は川神の先生じゃなく俺が勤める」

「構いません」

ジークとマルギツテは向かい合いマルギツテは自分の武器であるトンファアーを構えた、ジークも自分の両腕を上げて独特の構えをとった。

「マルギツテさん、貴女との戦いで良いメロデイが奏でられることを祈っています」

「私との戦いにそんな余裕は無いと知りなさい」

「それじゃあ行くぞ、始め!!」

新島の合図で最初に動いたのはマルギツテだった、マルギツテは両手のトンファアーを振りかぶった。

「トンファアークロス!!」

次の瞬間マルギツテは両手のトンファアーでジークの首に十字の打撃を与えようとした。

「涅槃の遁走曲・縦!!」

「くっ!?!」

トンファアーの打撃をジークは受けたように見せかけて後ろにバク転をしながら躲した、そして躲しながらマルギツテの顎を蹴り上げ吹き飛ばした、飛ばされたマルギツテは顎を攻撃されたことにより脳が揺れふらふらと立ち上がった。

(くっ!?!まさかあんなカウンター技を持っているとは、脳が揺れてるせいで平衡感覚が・・・)

「その状態ではもう何も出来ないでしょう、諦めなさいマルギツテさん」

「そう易々と諦めるわけにはいき、ません!」

マルギツテは不屈の闘志でジークに向かって連続でトンファアーによる攻撃を繰り返した、しかし狙いの定まらない攻撃はジークに当たることはなかった。

(残念ですが彼女の音色もここまでですかね・・・!?)

ジークがマルギツテに見切りをつけようとしたその時、狙いの定まらない攻撃をしていたマルギツテが急に狙いが定まった一撃をジークに繰り返した、ジークはそれをバク転で躲しながらマルギツテから

距離をとった。

(最後の1撃、今までの単調だった軍歌じゃなく、野性味溢れるロックに変わりました)

ジークがマルギツテを見るとマルギツテは左目の眼帯を外した、その目はまさしく獲物を捉えた猟犬のように鋭かった。

「やはり達人相手に眼帯を着けたままでは敵いませんね、しかしここからが私の本気だと知りなさい!!」

「なるほどこのロックこそが貴女の本質、という訳ですか、ならこのジークフリートもその本気に答えましよう♪」

ジークとマルギツテはにらみ合いを始めた、最初に行動したのはマルギツテだった、さつきと同じようにトンファアのラツシュをジークに浴びせた、ただしさつきの攻撃と明らかに違うところがあつた、それは狙いの定まらない攻撃ではなく1撃1撃が急所を狙っているからである、しかしジークはその攻撃も難なくいなしていた。

「トンファアキック!!」

マルギツテはラツシュの最後に回し蹴りを放つた、すると今まで捌きに徹していたジークがマルギツテの蹴りを躲しながらマルギツテの足を掴んだ。

「行きますよー♪、コン・アレグレッツア!! (快活に)」

ジークはマルギツテの足を掴むとドリルのように回転した。

「涅槃の遁走曲!!」

ジークは遠心力を利用しマルギツテを投げ飛ばした、投げられたマルギツテは地面を転がりながら受け身をとった。

「野性味溢れるロック中々のメロディでした、しかしまだ粗いですね」

「ま、まだ私はこんなものではないと知りなさい!!」

マルギツテはふらふらと立ち上がりトンファアを構えた。

「H a s e n J a g d」

マルギツテは両手のトンファアを回しながらジークに向かって突撃した、そしてすれ違い様にジークの急所に2撃与えた。

「やったか・・・ぐあ!?!」

攻撃を終えたマルギツテがジークに振り返ると二つの衝撃がマル

ギツテを襲った。

（バ、バカな何故私にダメージが、まさかあの一瞬で私にカウンターを、しかも私が攻撃したところと同じ場所に当てるとは・・・）

「因果応報のマルチストレイン♪」

流石のマルギツテもこれほどのダメージを受け倒れてしまった、新島がマルギツテに近寄り気絶をしたのを確認すると勝者の名前を上げた。

「勝者ジークフリート!!」

ジークはマルギツテを担ぎ上げると校舎に向かった、新島もニヤリと不敵な笑みを浮かべながら校舎に戻っていった、すると校舎の前に兼一と一子と額にバツ印のある小さな女の子が待っていた。

「ジークさん!!」

「おお、兼一氏お久しぶりですね」

「あの兼一さんこの人は？」

「ああ一子さん、紋白ちゃんこの人はジークフリートさん」

「凄い名前ね」

「ん？お前は九弦院の」

「おや、貴女は九鬼家のお嬢さん」

紋白とジークフリートは社交界などでたまに顔を会わせるので面識があった。

「ジークフリートさん、私は川神一子って言います」

「ジークフリートこと九弦院響と申します、ジークで結構です」

「ほんとにジークさんとは久しぶりですね」

「ええ、私はコンサートで各地を転々としていましたからね」

「やっぱり新島に呼ばれたんですか？」

「はい、総督に呼ばればどこでも駆けつけるのがこのジークフリートです」

「ハハハ、変わらないなジークさんは」

兼一がジークと話していると紋白が兼一の袖を引いた。

「どうしたの紋白ちゃん」

「そろそろ我は帰る時間だ、今日は会えて楽しかったぞ兼一♪」

「また明日ね」

そう言うのと突如ヒュームが現れて紋白と一緒に帰っていった。

「じゃあ兼一さん私も帰るわ、明日からの修行のことおじいさまたちに話さなきゃだし」

「うん、明日の朝川神院に迎えに行くからね」

「はい」

一子は元氣一杯の返事で川神院に帰っていった、そして校庭には氣絶したマルギツテと兼一とジークと新島のみになった。

「では私はこの方を保健室に連れていきます」

「俺様もいく、そうだ兼一今日の夜少し飲まねえか？、これからのことをお前と相談してえ、ジークも良いな？」

「私は構いませんよ」

「分かった、じゃあ僕が夜九鬼の本部まで迎えに行く」

新島たちと夜に会う約束をすると兼一も島津寮へと帰っていった、そしてジークとマルギツテの戦いを給水塔の上から見ると影があった。

「兼一って人もあの帽子の人も外から来た達人は半端ないね、アタシも少し試してみようかな、それに闇の武術家にも興味があるしね」

その人物はそう言い残すと給水塔飛び降りて姿を消した。

14話

ジークとマルギツテが戦い始める少し前、兼一は授業を終えて帰る支度をしていた。

「兼一さん帰るなら一緒に帰りましょ」

「あれ風間君たちとは良いの？」

「今日は先に帰ってもらったわ、修行の件もあるし兼一さんと少し話したいの、それにキャップたちには夜に話をすることになってるし」
「分かった一緒に帰ろう」

兼一たちが話していると教室のドアが勢い良く開いた、そして兼一たちがドアの方を見ると額にバツ印の付いた少女が仁王立ちし後ろにはヒュームが控えていた。

「我降臨である!!」

「君は、紋白ちゃん!!」

「ひっさしぶりだな兼一♪」

彼女の名前は九鬼紋白、九鬼家の末っ子で兼一とは前の任務で知り合っていた、教室に入ってきた紋白は兼一に向かって飛び込み兼一もそれをしかり受け止めた。

「久しぶりだね紋白ちゃん」

「兼一さん九鬼の人とも知り合いなの？」

「うん昔ちよつとね」

「昼の決闘見ていたぞ、二人とも良い試合だった」

一子は誉められたことにまんざらでもなさそうに照れた、話をしていくうちに紋白も一緒に帰ることになり校舎の廊下を一子、兼一、紋白の三人が歩いていた、ヒュームは紋白の命令で少し離れた場所から警護していた。

「そう、じゃあお母さんとも仲良くやっってるんだ」

「ああ、それにしてもまた背が伸びたなく兼一は」

「そうかな?自分ではわからないけど、それより新島たちの面倒みてもらって悪いね」

「いや構わないぞ、こっちこそ闇との戦いに兼一を巻き込んでしまっ

た・・・」

「そんな事、紋白ちゃんが気にしなくて良いよ」

兼一はニツコリとした笑顔で紋白の頭を撫でた、紋白もその手を払うことなく兼一に任せていた。

「ねえ兼一さん闇って何?」

「いや!?何でも無いよ」

「そう?」

話しているうちに兼一たちは下駄箱に着いた、そして靴をはきかえ外に出ると校庭ではジークが戦っていた。

「あ、ジークさんだ」

「兼一さんあの人が知ってるの?」

「うん僕の仲間なんだ」

「ん、アイツは確か・・・」

そんな事を話しているうちに決闘はジークの勝利で幕が降り兼一は一子と紋白を連れジークに近づいた。

その日の夜兼一たちは酒を飲みながら話をしようと九鬼の本部近くにあるバーに来ていた。

「いらっしやいませ」

「三名、テーブル席を頼む」

「こちらへどうぞ」

新島が案内を頼むとバーテンダーらしき男性がテーブル席へと案内した。

「ご注文は」

「えーと日本酒ありますか?」

「はい」

「ならそれを」

「私はワインをいただけますか」

「そちらの方は」

「俺様もワインで良い」

少しすると注文した酒が届きグラスが三人に行き渡ると乾杯をし

た。

「乾杯」

「あつ美味しい」

「ふむ、中々の物を出しますね」

「俺様を満足させるとは、バーテンさんよ中々やるな」

「いえいえ、どんなお客様にも楽しんでいただくのが基本戦術」

三人が酒に舌鼓を打っていると新島が話を切り出した。

「ところで兼一よ川神一子を弟子にしたんだろ？」

「何で知ってるんだ!？」

「俺様に知らないことはないぜ」

「ほう、兼一氏が弟子を取りましたか」

「やっぱりあれか才能がない彼女に昔のお前の姿を見たか？」

「それだけじゃないさ、僕自身も彼女を強くしたいと思ってる、それに人を教えることで見えてくるものもあると思うんだ」

「一理ありますね」

「まあな、それとジークよお前は明日から川神学園に通ってもらおう、住まいは九鬼が面倒見てくれるそうだ」

「分かりました総督の意のままに」

三人は酒を飲み進めるとジークは旅の疲れからか眠ってしまい新島は兼一と話を進めた。

「兼一よお前の腹は俺様は何となくだが読めたぜ」

「へえ、宇宙人に分かるとは僕もいよいよ毒されてきたかな」

「お前はこの川神の武術家たちを強化しようとしてるだろ」

「川神には数多くの武術家たちがいる、恐らく闇も相当な数がこの川神に押し寄せて来るはずだ、師匠や僕たち新白のメンバーを合わせても恐らくカバーしきれない、だから川神の武術家たちを闇と戦えるぐらいにする必要があると思うんだ」

「簡単な話じゃねえぞ」

「ああでもやるしかない、それに闇も気になるが他にも闇に近い人たちの動きも気になる」

「例えば？」

「中国の内陸にあると言われていた傭兵集団梁山泊とか、それと双壁をなす曹一族かな今のところは」

「ああ中国の奴等かアイツ等は俺様の情報網をもつてしても中々掴めない奴等だからな、だがアイツ等が動いても困るな俺様の諜報員を向かわせるとするか」

「彼等は危ない集団だあまり深追いはするなよ」

「ふっ、分かっているって俺様はそんなへましねえよ、さてそろそろ明日も学校だし帰るか」

「そうだな」

兼一たちは店を出た、起きなかつたジークは後で九鬼の人間が迎えに来る手はずを新島が整え店にも了解を得て置いていった、そして兼一が寮に戻ると皆はもう寝ているのだろうか電気はみんな消えていた、兼一は水を飲もうと食堂の電気をつけるとそこには忠勝が一人座っていた。

「やあ源君こんな遅くにどうしたの？」

「いや貴方を待ってたんですよ」

「僕を？」

「ええ、今日の夜一子が俺たち風間ファミリーのメンバーを集めたんですよ」

「風間ファミリー？」

「風間から聞いてませんか？、アイツは自分の気に入った奴を集めて風間ファミリーっていう集団を組んでるんですよ」

「へえ〜（昔僕たちが作った新白連合みたいなもんか）」

「まあ、俺は最近入れてもらったんですけどね、それで何時もは金曜にメンバー全員が集まるんですけど、今回は一子がみんなを集めたんです、大事な話があるって」

兼一たちが飲んでいる頃風間ファミリーの集会所でもある廃ビルでは、風間ファミリーのメンバーが一子に呼ばれて集まっていた。

「みんな揃ったぞワン子、で俺たちを集めた理由は何だ？」

「うん、実はねアタシ兼一さんの弟子になることにしたの」

一子の言葉に進行を勤めていた大和だけじゃなくファミリー全員

が驚いた。

「弟子になるって川神院はどうすんだよ」

「辞めはしないわここに来る前にじいちゃんに言ったら、少し別の風にあたるのも良いだろうって言われたし」

「それで大丈夫なのか姉さん」

「じいじがそう言うんなら大丈夫だろ、それにしても兼一さんに稽古つけてもらえるなんて羨ましいぞワン子」

「えへへ、それとお姉さまアタシ夢を変えるわ」

「師範代の夢を諦めるってことか？」

「おい、ちよつと待て一子!!」

一子の突然の言葉に今まで黙っていた忠勝が百代との話に割り込んだ。

「何、たっちゃん？」

「お前はそれで良いのか？、お前が長年師範代になるために頑張ってきた苦労が水の泡になるんだぞ!!」

忠勝と一子は同じ弧児院の出で忠勝は弧児院にいた頃から一子の事が好きだった、そして一子は川神院に引き取られ、忠勝は宇佐美に引き取られていった、忠勝は引き取られてからも同じ川神にいた一子の事を気にかけていた、だから誰よりも一子の努力を知る人物でもあった。

「水の泡にはさせないわ」

「え？」

一子は忠勝にそう言うのと百代の方を向き百代の眼を見て言葉を続けた。

「お姉さま、アタシの新しい夢は川神院総代になることよ」

一子のその言葉に全員が驚いた、あの百代を慕っていた一子が百代を倒すと言っているからだ。

「ワン子マジで言ってるのか？」

「真剣よ大和」

「でも一子さんそれはモモ先輩を倒すことになるんですよ」

「分かってるわまゆっち」

「犬、ちゃんと考えて決めたんだな？」

クリスは一子の眼をじつと見つめ一子に聞いた。

「この眼が冗談を言ってる眼に見える？クリ」

「いや、試すようなことを言っすまない、頑張れよ犬!!」

「本気なんだね：：僕はワン子の決めたことなら尊重するよ頑張って」

「モモ先輩を越えるってことは並大抵の事じゃないぜ、覚悟決めろよワン子」

「ワン子の覚悟は本気だな頑張れよ!!、くうく燃えてきたぜ!!」

「モロ、ガクト、キャップありがとう」

一子は皆から思い思いの言葉をもらおうと最後に百代が一子の前に立った。

「お、お姉さま・・・」

「私が怒るとでも思ってるのか？」

「え？」

「私は嬉しいんだ、それほど遠くない未来に強くなったお前が私の前に立ちほだから、強者と戦えるんだこれほど燃えることはないだろうか？」

「お姉さま・・・」

「ただし」

百代は鬨気を剥き出しにして一子に不適な笑みを浮かべ言葉を続けた。

「簡単に負けるつもりはないがな！」

「アタシも簡単に勝てるとは思ってないわ、でも必ずお姉さまの隣に立ってみせる」

「楽しみだ」

百代と一子はファミリー全員の見ている中で固い握手を交わした。

所変わり夜の寮で忠勝と兼一はお茶を飲んで話していた。

「そう、一子さんがそんな事を」

「ええ、兼一さんほんとに一子を強く出来るんですか？」

「それは一子さんにも言ったけど彼女次第だよ」

「そうですか、兼一さん一子の事をよろしくお願いします」

忠勝は兼一の眼を見て兼一の言葉を信じ一子を任せることに決めた、そして二人は夜も遅くなつたので眠ることにし、兼一は自分の部屋に入るとケータイを取りだし電話をかけた。

「はい、もしもし」

「あ、岬越寺師匠ですか？、兼一です」

「兼一君か、今日は登校初日だったんじゃないのかい？、どうだい川神は」

「一言で言うとなんか色々な武術家があります、闇に狙われそうな子も多いです」

「なるほど、でそれを報告するために連絡したのかね？」

「いえ、師匠たちは全員居ますか？」

「長老以外は居るよ」

「すみませんが皆さんをお呼びください」

「分かった少し待っていてください」

秋雨は梁山泊に居る師匠たちを集めに電話口を離れた、程なくして全師匠が集まった。

「何なんだ兼一の奴」

「おいちゃん夜のお楽しみ中だったのにな」

「アパ〜眠いよ」

「・・・ふあ〜」

「兼一君全員集まったよ」

「師匠たち全員に聞こえるように受話器を耳から離してください」

秋雨が受話器を離すと師匠たちは兼一の言葉に耳を傾けた。

「僕、ある事情で弟子をとるようになりました」

「！！！！！！」

突然の兼一の言葉に秋雨たちは一瞬言葉を飲んでしまった。

「おい、兼一経緯を話せ」

「はい」

逆鬼の一言を聞いた兼一は一子の事を話した、そして話終わると逆鬼が言葉を発した。

「とうとう、お前も弟子を持つまでになったって事か・・・」

「至緒ちゃん感慨に耽ってるね」

「そ、そんなんじゃねえよ!!」

「アパパ、弟子の成長よ」

「……めでたい」

「……」

師匠たちが兼一に弟子ができた事を喜んでいる中で秋雨だけは黙っていた、そして受話器をまた自分の耳に当て兼一と話した。

「兼一君、君が弟子を持ったことは私も他の皆と一緒にとても嬉しい、だが分かっているかね？弟子をとるということは一子君の成長を君が握る事でもあることを」

「……」

「君の導き一つで彼女の夢を近づかせる事も出来るが、逆に遠退かせる事もできる、弟子をとるということは簡単ではないよ」

「僕はなりたいんです」

「？」

秋雨はこの言葉は皆に聞かせるべきだと思い、受話器をまた離し皆に聞こえるようにした。

「師匠たちは僕に生きる道標を示してくれた、師匠たちは僕を信じ、そして僕は師匠たちを信じてその道をしっかり歩むことが出来ました、僕はそんな師匠たちのような武術家になりたいんです!!」

その言葉を聞き逆鬼は涙を流すのを堪えようと上を向き、剣星は優しい笑顔で弟子の成長を喜んだ、アパチャイは号泣し、しぐれも少しだけ微笑んだ、そして秋雨はまた受話器を耳に戻した。

「そうか、それが分かっているなら大丈夫だろう、頑張りなさい」

「は、はい!!」

秋雨の顔からも剣星と同じく優しい笑みがこぼれていた。

「つきましては岬越寺師匠にトレーニングの機器を作ってほしいんですけど」

「構わないよ、君のトレーニング機器は全部残っているからそれを改良しよう」

(一子ちゃんにあんな地獄を……いやでも必要だな)

「それとしぐれさんにも二つ作ってほしい物が」

秋雨は受話器をしぐれに回し、兼一はしぐれに作って欲しいものを説明した。

「どうでしょう出来ますか？」

「・・・一つはすぐに渡せる、ボクの部屋にあるから・・・もう一つは一週間時間をもら・・・う」

「ならお願いします」

「なら明日着くようにアパチャイに届けてもら・・・う」

「アパ、前と同じところに届けるよ」

「お願いしますアパチャイさん、それでは明日も早いので僕はもう寝ます、皆さんありがとうございました!!」

兼一は電話を切るとしぐれとアパチャイは届け物の準備をするために自室に戻った、そして電話機の前には逆鬼、剣星、秋雨が残った。

「弟子の成長は嬉しいもんだよな」

「そうね、あのいじめられっ子がここまで成長するとはおいちゃんも驚きね」

「そうだな、我らはよい弟子を持った」

「ところでよ秋雨やっぱりあの計画進めた方がいいんじゃないか？」

「ふむ、そうだな」

師匠たちは眼を光らせて次の策を着実に準備していた、だがその事を兼一はまだ知らない。

15話

次の日の朝兼一は寮の前に立て掛けられていた布にくるまれた棒状の物を抱えタイヤと地蔵を引きながら川神院を目指して走っていた。

程なくして川神院が見えてくると正門の前には一子が兼一を待ち構えていた。

「やあ一子さん、早いね」

「朝練だもの、ところで兼一さん何を持っているの？」

「これ？後で教えてあげるよ、さて手始めにタイヤ引きしようか」

「ええ、兼一さんが来る前もタイヤは引いてたから得意よ！」

「そうそりやよかつた、じゃあ」

兼一はタイヤ三本に地蔵を三体くくりつけ、それを一子に結んだ。
(うっ!?重い地蔵ね一体十キロ以上はあるわね、こんなのを兼一さんは六体も引いてきたの!?)

「どうしたの？」

「な、何でもないわ、で兼一さんこれで何処まで行くの？」

「そうだな、今回は始めての修行だから軽く流す感じでやろうか」

「じゃあ川原を走る感じ？」

「そうだね、じゃあ川原を」

(この地蔵の重さも考えたら三周ぐらいかしら)

「軽く十周行こうか」

「じゅ、十周!?!」

「大丈夫、大丈夫僕が来る前にもやってたんなら軽いよ」

兼一はにこやかな顔で一子と共に川原を十周走った、走り終えて川神院に着くとスカツとした顔の兼一とは裏腹に一子はふらふらになっっていた。

「一子さんちよつと」

「はあ〜い」

一子はふらふらになりながら兼一の方に行くと兼一は朝持っていた布にくるまれた棒状の物を一子に渡した。

「それを一子さんにあげる」

(少し重いわね何かしら?・・・これは!?)

一子が巻かれていた布をとると中には薙刀が入っていた。

「兼一さんこれは?」

「一子さんの訓練用に僕の武器の師匠が作った特製の薙刀だよ」

一子は薙刀を振り回した、少し今使っている物より重いが振ることに支障はなく使いやすい物だった。

「いいわこれ」

「でしょ、それと僕が一子さんに修行をつけるにあたって二つ守ってほしい事があるんだ」

「な、何?」

「一つ、強くなることも大事だけど学生だから勉強もおんなじくらい大切だ、だから修行で疲れていても授業は寝ちゃダメだよ?、もし寝たらそこで僕は修行を止める」

「うーん一番キツイ条件だわ、でも頑張ってみる!!」

「二つ、僕も僕の師匠も活人拳を掲げているんだ」

「人を生かす拳ね、川神院もそうだわ」

「でも武術家の中には人を殺す殺人拳を掲げる者もいる、どんなことがあっても活人拳を忘れちゃダメだよ?」

「分かったわ、私も自分の力を人殺しのためには絶対使わない」

「ならよかった、じゃあそろそろ僕は帰るよ」

「そろそろ朝御飯の時間ね、後で登校の時に会いましょう」

兼一と一子はその場で別れた、そして朝御飯を食べ川神大橋を昨日と同じ面子で登校していた、昨日と違うのはその中にジークが加わっていた事だろう、ジークは一通り自己紹介を済ませるとクリスが昨日のマルギツテの事を謝りだした。

「ジークさん昨日はマルさんがすまなかった」

「いえいえ、あの方の野性味溢れるロックまた聞きたいものです」

「マルさんも次は負けなと言っていたぞ」

「あの子ジークさん?」

「何でしょうモロさん」

「確か去年出たゲームのエンディング歌ってますよね？」

ジークは学校を卒業する前からプロの音楽家として活躍しており、この頃は更に有名になりゲームや他のメディアにもよく顔を出している。

「良くご存じですね」

「僕CD持ってますから」

「それは嬉しいですね」

「今度CDにサインもらって良いですか？」

「構いませんよ」

モロとの話を終え、今度はジークが義経の方に近づいた。

「義経さん今朝偶然聴いてしまったのですが、貴女の笛の音を」

「聴かれていたのか!? 義経は恥ずかしい／＼」

「素晴らしい音色でした、あの音色を聴き新しい曲のインスピレーションを得ました」

「ほ、本当か!？」

「どうでしょう、今度私のバイオリンとセッションしてみませんか？」

「是非！」

「これは楽しみが増えました」

ジークは義経と話していると隣で自転車を押している清楚の事が気になった。

(やはりこの方からは、我が魔王と同じ王の音色が聞こえています、まあ正体は名前からあの英雄でしょうからこの音色も当然なのですが、彼女の性格とは合いませんね)

「あのか何か私の顔についてますか」

「いえ、何でもありません、ジッと見てしまい申し訳ありません」

「い、いえ」

「皆ー!!」

「空から美少女の登場だ！」

そんな話を話していると後ろから一子がそして空から百代が突如現れた、そして百代と一子を加え学園に向かって歩いた。

「貴方がジークさんか、マルギツテ倒したそうですね」

「ええ、あの方との戦いは中々楽しめました」

「確か貴方は変則カウンターの使い手とか」

「ええ、貴女も挑んでみますか？」

「ええ今度は非！」

(なるほど、総督の言う通り少しバーサーカーに似ていますね)

そんな話をジークとしていた百代を尻目に風間ファミリーのメンバーは朝兼一との修行を終えたであろう一子に注目していた。

「一子修行はどうだ」

「うん、確かにキツイけどやっていけそうよ」

「そうか・・・」

「源さん心配だったんだな」

「うるせえ直江」

「俺もすげえ修行してみてえな!!」

「俺様は勘弁してほしいな」

「同じく」

一子に色々な質問を投げつけている風間ファミリーのメンバーだった、それを兼一は後ろから見ており、大和は兼一に歩くペースを合わせて話しかけた。

「どんな修行を？」

「簡単なものだよ二十キロの地蔵三体がくくりつけてあるタイヤを引いて川原を十周するだけ」

「うわあくこりやワン子授業中大変だな」

「いや大丈夫だよ」

「え？」

「運動した後疲れて眠くなるってことはまだ眠る体力が残ってるって事だから、その眠る体力も残さないようにすれば良いだけだから」

「じゃあそれを見越してその修行を？」

「うん、学生だからね授業中寝させるわけにはいかないでしょ」

そんな話を話しているうちに皆は学園に到着し、各々の教室に向かっていた、教室の決まっていないうちのジークは新島が学長に頼みS組に入れる事にした。

16話

学園ではジークの登場に彼の音楽のファンや彼の容姿を気に入った女子たちの間で早々にファンクラブが設立されていた、対してそれを見た一部の男子は敵が現れたと敵意をむき出しにしていた、だがとうのジークはそんな事を気にせず頭の中は作曲の事でいっぱいだった。

そして授業が終わりその日の放課後、一子に一通りの修行をつけた兼一は九鬼から呼び出しを受け九鬼家本部の会議室を訪れていた、そこには新島やジークそして一人の老婆が兼一を待っていた。

「来たね隼人の弟子、とりあえず座りな」

「は、はい」

兼一は言われるがまま椅子に座った、老婆は兼一をジッと見るとため息を吐き自分も兼一たちの反対側の席に腰を落とした。

「あのく何か？」

「確かにアンタは隼人の弟子だね、昔のアイツとどこか似てるよ」

「長老にも言われました、でも僕は似ても似つかないと思いますけど、ところで貴女は？」

「そうだったアンタとは初対面だったね、アタシは九鬼家従者部隊序列二位のマーブルさ」

「その名前は聞いたことがあります、確か昔長老と一緒に戦ってたっという」

「昔の話さね、さて本題に移ろうここに呼んだのは清楚の事さ」

「清楚ちゃんが何か？」

「この頃川神の闘気にあてられてか封印が弱まってきているみたいなのさ」

「封印？」

「あんた達あの子が誰のクローンかは分かっているね？」

三人は一度顔を見合わせるとコクリと頷いて答えた。

「今の清楚はまだあの英雄の器にするには不安があるからね」

「まあ、あの英雄なら慎重になるのも分かります」

「ほう、前来たときは清楚が誰のクローンか分からなかったと聞いてたが？」

「ええ、でも岬越寺師匠が彼女に初めて会った時に言っていましたから、彼女を一人にはいけないと、当時は言葉の意味が分からなかったんですけど自分で調べて思い至りました」

「そうかい、哲学する柔術家がそんな事を」

「まあ名前がまんまだからな」

「まあね、ただ本人は自分は文化タイプのカローンだと思ってる」

「でも何時までも秘密には出来ねえだろ」

「アタシも何時までもこのままにする気はないよ、あの子が精神的にも肉体的にも成長したら封印を解くつもりだったんだ、アタシはそれを二十五歳と見てたんだが」

「川神には武神を始め色々な武術家たちがひしめき合ってる、それに兼一やジーク更には他の達人たちまで出てきたら流石に封印なんかぶっ飛んじまうだろうな、それに闇の連中もあの英雄の力は喉から手が出るほど欲しいだろうからな」

「ああ、本当は新しく来た九弦院、アンタに3年のS組に入って清楚の事を見ていてほしかったのさ、しかしもうクラスは決まっちゃまったからね、どうしたもんか」

マープルの言葉にジークは鼻歌を歌いながらまるで我関せずといつているようだった、マープルが頭を抱えているのを見て新島はそんな彼女をけらけらと笑った。

「婆さん安心しな俺様に策がある」

「目上のアタシに対して婆さんかい、口の聞き方のなっていない宇宙人だね、まあ聞こうじゃないか？」

「簡単さ、今俺達の仲間が二人この川神に向かっている、そいつらの一人をあの子のクラスに入れるんだ」

「二人？来るのは二人なんだろう、なぜ一人なんだい」

「二人はSの勉強についていけるがもう一人はそうはいかなくてね、今日の俺様がS組の授業を受けてそう思った」

「そいつは腕は確かなんだろうね？」

「それは心配しなくていい、うちの連合の主力だからな」

「新島、誰を呼んだんだ？」

「ヒミツだ」

「ん、電話だちよつとすいません、はいもしもし？あつ武田さん！お久し振りです、お元気ですか？、川神に居るんですか!?!、もしかして新島に呼ばれて？、困った事つて何ですか？、ええ!?!、すぐ向かいます、場所は？、親不孝通りですね？、分かりました!」

「武田が何だつて？」

「川神に来ててちよつとトラブルが起きたらしい」

「そうか、なら俺達も行くかジーク？」

「武田さんと会うのは久し振りですね行きましょう」

「マープルさん今回はこれで失礼しても？」

「ああ構わないよ、宇宙人、清楚の事は頼んだからね!」

「ああ、貸しにさせてもらうぜ」

「いいだろう、何かあつたら頼りな」

マープルの返事を聞くと新島はニヤリと笑いながら会議室を兼一たちと一緒に出ていった、兼一が九鬼本部で話をする少し前、百代は鉄心に言われた基礎修行のロードワークに出掛けていた、そして親不孝通りを偶然通りかかると板垣亜巳と出会った。

「お前は確か板垣家の長女」

「武神かい、奇妙なところで会うね」

「アンタの妹、特に板垣辰子は凄い才能を持つてるな」

「うちの切り札だからね辰は」

「釈迦堂さんは元気か？」

「あの兼一つていう達人に負けてからは師匠にしては珍しく修行に励んでるよ」

「釈迦堂さんが負けた!?!、やはりあの人は面白い!」

百代は次に兼一と戦うことを想像し不敵な笑みを浮かべていた、その百代の反応に亜巳がついていけないと首を振っていると、百代は亜巳の後ろに武器を振り降ろそうとしている男を見て咄嗟に叫んだ。

「危ない!?!」

「!?」

百代の一言で亜巳は瞬時に男の攻撃を躲し百代の隣に立った。

「すまないね武神」

「いや構わない、それより、アンタどういつもりだ?」

「どういうつもりとは?」

「アンタ躊躇なくコイツを殺すつもりだったろ」

「闇だからな、依頼があれば殺しもする」

「闇だと?」

「闇も知らんのか?、武神と呼ばれてる割には随分温い世界を生きている」

「悪かったな」

「アンタが闇の達人かい」

「知ってるのかお前?」

「ああ、一度師匠から聞いたことがある、武の世界には大きく分けて人を生かす活人拳と殺法や殺人術を極め人を殺すことを突き詰めた殺人拳の二種類があるって」

「ほう、お前の師匠は少しは分かっているようだな、闇とは殺人拳を極めた者たちの集団の事だ、俺は闇の武器組が一人オルタル・シン」

「何だ、要するに人殺し集団ってことか、武術をそんな事にしか使えないなんて悲しい連中だな・・・!?」

百代がそう言うとう首筋を何かを通りすぎた、すると百代の首筋にはうっすらと何かで切ったような跡ができ、少し血も流れていた。

「言葉に気を付けろよ小娘が」

（何か飛び道具を投げたのか!?!、見えなかった）

（武神が気付けない攻撃があるなんてね）

「さて武神とそこの娘よどうする?」

「何がだ」

「二人とも素直に闇に降れば無傷で連れていく、しかし抵抗するなら殺さない程度にならないたぶることを許可されている」

「アタシも入ってるのかい?」

「私の攻撃をあの一瞬で避けた、連れて行くには十分だ、さあどうする

か選べ」

「はあく、完璧面倒に巻き込まれたね、どうするんだい？、武神」

「聞くまでも無いだろう？」

百代の返事に亜巳はフツと笑った、そして二人はオルタル・シンと戦うことを決め杖と拳を構えた。

「アンタにはついていけない、もしアンタについて行って闇に入ってしまうと、私が尊敬してる人には会えない気がする」

「アタシも師匠に恥ずかしい真似は出来ないからね」

百代の頭の中には自分を負かしそして何時か再戦を誓った男の顔があった。

「バカな奴等だ、その選択、後悔させてやろう!!」

シンも自分の武器であるジャマダハルを握り構えた。

「おい、相手は私たちより実力が上の達人だ、二人の全力の技を同時に当てるぞ」

「仕方ないね、分かったよ」

二人はシンが行動を起こす前に先手を打った、百代も亜巳もシンに向かって突撃した。

「お手並み拝見といくか」

「その油断が命取りだ」

「川神流」

「禁じ手、富士砕き!!」

「大蛇!!」

百代は渾身の力でシンに殴りかかり、亜巳は上空に跳び自身の武器の杖で渾身の一撃をみまっした。

「両方ともガキが放つにしては中々の威力の技だな、だが」

シンは百代の拳を武器の上で滑らせ上空の亜巳に百代の拳を当てた。

「ぐあ?!」

「しまっ?!」

「当たらなければどうという事はない」

亜巳は百代の富士砕きを受け倒れた、百代は亜巳に自分の攻撃が当

たってしまったことで隙ができ、シンはそれを見逃さず百代に技を放った。

「暗黒武踏」

シンは百代の両足の筋を斬ると百代は足元から崩れ落ちうつ伏せに倒れた。

「さて武神どうする、たしか貴様は瞬間回復という回復技を持っているそうだが、やってみるか？」

シンは百代の頭を踏みにじりながら聞いた、亜巳も意識はあるが百代の富士砕きをもろに受け身動きが出来ずにいた。

（瞬間回復してもいいがここで回復してもこの体勢じゃ直ぐ様コイツは攻撃するだろう、気の消耗戦になったらこっちが不利だ）

「しないのか？、なら念のためもう少し痛め付けておくとするか…!？」

シンは武器を振り上げ百代を攻撃しようとしたその時、突如シンは殴り飛ばされ百代から強引に引き離された、だがシンは受け身をとって拳が飛んできた方を見ながら武器を構えた。

「誰だ!!」

「全く女性を痛め付けるなんて趣味が悪いじゃない」

「全くだ、だがこれ以上は私たちがさせん」

「き、貴様等は」

百代の前には兼一の親友で達人となったボクサー、武田一基と武田と共に達人になり若くして久賀館流の師範となった久賀館要の二人が立っていた。

17話

一基は百代たちをシンから庇うように立ち拳を構え、要は百代たちの手当てを始めた。

「要が言ったようにこれ以上はさせないよ」

要は二人を見て先に亜巳の方から治療を始めた。

「うっ!？」

「貴女たちは?」

「安心しろ、私たちが来たからにはアイツの好きにはさせん」

一基たちとシンの間には因縁があり、前の九遠の落日の時に一基とフレイヤを含めた新白のメンバーと馬師父の娘である馬蓮華、そして蓮華の仲間の劉玄孫、諸葛公安と協力してシンを倒していた。

「あの時私が言ったように貴様等は達人となったか」

「ああお陰さまでね、でどうする?」

「何がだ?」

「このまま僕やフレイヤと戦うかい?」

「・・・いや、止めておこう、ここで貴様等相手に手間取れば、梁山泊の弟子まで出て来て面倒だ、今回はあくまで様子見なのでな」

「ケンイチ君の到着を待つまでもないよ、今度は僕が一人であんたを倒すからね」

「言ってくれる・・・」

シンはそう言い残すと武田たちの前から走り去って行った、武田は完全に闘気が消えたのを確認すると百代たちに駆け寄った。

「大丈夫かい?お嬢さん」

「ええ何とか、ところで貴方たちは兼一さんのお知り合いですか?」

「そうだよ僕は武田一基、あっちの女性は久賀館要だ、兼一君が川神に來ているとある男から電話があつてね」

「そうですか、でも貴方はどこかで見たことがあるような」

「そうかい♪」

「あっ!?!思い出した、確か最年少で日本ボクシング界のタイトルを総ナメにしてアメリカに渡ったプロボクサー、武田一基」

一基は鼻唄を歌いながら髪を櫛で整えていた、すると要が亜巳の応急措置が終え、次は百代の応急措置を始めようとした。

「こっちの紫色の髪の子の処置は終わった、次は君だ」

「私は大丈夫です」

百代は瞬間回復を発動し足の怪我を治癒して立ち上がった。

「便利な技だね」

「確かに凄い技だしかし」

「しかし何ですか？」

「その技に頼りすぎると防御が疎かになる、どんな攻撃を受けようと一瞬で回復出来ると思つてな、防御の大切さを忘れないことだ」

「・・・分かりました肝に銘じておきます、それとさっきの人はいったい」

一基も要も闇のことを百代に話していいものかどうか考えていた。

（うくんこれは誤魔化せそうにないじゃない、兼一君に相談するしかないね）

一基はケータイで兼一に連絡をとった。

「やあ兼一君久しぶりじゃない、うんこっちは元気さ、実は今川神に来ててね、そうなんだ、それで来て早々ちよつと厄介なことになってね、実は武神ちゃんが闇の武器組の達人に襲われてね、そうかいすぐ来てくれるかい待つてるよ、場所は親不孝通りって場所だから」

十分程で兼一たちは九鬼の本部から親不孝通りに着いた、兼一たちほど早く走れない新島もジークに担がれて到着した、そして兼一たちは一基と要を加え話し出した。

「まさかこんなに早く闇が手を出してくるなんて」

「まあアイツは様子見と言つてたからね、本格的に手を出してくるのはまだ先だと思っけどね」

「俺様はそんな事より、武神を拐おうとしたのが武器組っていうのも気になるな」

「何故だ」

「川神百代は武器を使わんだろ？、武器組なら武器を使う奴を拐うんじゃないか？」

「うーん、もしかしたらまた落日の時みたいに武器組と無手組が手を組んでるんじゃない」

「そうなるとう介ですね」

「あの、そろそろ私たちにも話してくれませんかね」

話し合いからハブられていることに百代は少しイラツとして兼一たちに話しかけた。

「そうだったごめん、実は」

「話していいのか？」

「ここまで被害が出ちゃ話さないわけにはいかない」

「ならその話俺も混ぜちゃくれねえか？」

最後の声は夜道の向こうから聞こえ次第にこつちに近づいて来る足音が聞こえた、その声の主は亜巳が時間になっても帰ってこなかったことを心配した釈迦堂だった。

「釈迦堂さん」

「よお兼一さんよ、それにしても達人の人数が増えてるな」

「兼一誰だ？」

「申し遅れたな俺は釈迦堂刑部って言うもんだ、そこにいるソイツの師匠でね」

「なら皆さんにお話しします」

兼一は自分が来た理由や闇の目的等を百代たちに話した。

「なるほどな、アンタほどの達人をあのジジイが呼ぶんだから何かあるとは思ってたが、かなりやべえ話だな」

「ええ」

「じゃあ武神だけじゃなくアタシたちも狙われてるのかい？」

「ああ、闇は戦力の補強をしようとしてるからな、闇としては一人でも強い奴を連れて行きてえだろ」

「.....」

「百代さん大丈夫？（無理もない自分が狙われていると知ってしまったからな）」

「フフフ」

「コイツ笑ってないか？」

「兼一さん、私は俄然ヤル気が出てきましたよ、あんな強い達人たちと戦えるなんて、だとするともつと修行に力を入れないといけないな」
「こいつが命狙われてる程度で落ち込むたまかよ」

百代は落ち込んでいるどころか強い敵と戦えることにうち震えていた。

「エネルギーシユだね〜武神は、そういう子僕は嫌いじゃないね」

「おい一基」

「嫌だな一番は勿論要に決まってるじゃないか〜」

「私はそんなことを言ってる訳じゃ・・・」

「いいっていいって、僕には分かってるからさ」

「武田さん、久賀館さん近いうちに私に稽古つけてくださいよ、勿論兼一さんやジークさんも」

百代の申し出に兼一たちは一度顔を見合わせるとニコツと笑いながら頷いた。

「闇が本格的に攻めてくるなら俺も早く昔の勘を取り戻さねえとな」

釈迦堂がそんな事を言っていると亜巳は怪我した体を引きずりながら兼一の前に立った。

「兼一さん、アタシにアンタの技を教えてくださいませんか?」

「僕の技?」

「師匠の考えを読んだアレさ」

「流水制空圏ですか?」

「ああダメかい?」

「構いませんが、強くなりたいたら僕じゃなくて適任がここにいますよ」

「ん?」

兼一は要に近づき要の方を指した、兼一は武器に精通してるわけではないので亜巳と同じ杖を使う要を勧めた。

「おい坊や勝手なことを」

「まあまあ、強くするのは良いことじゃない、それにハニーなら流水も使えるしさ」

「え!?!、フレイヤさん使えるんですか!?!」

「ああ、時間はかかったが元々一基が使ってるのを見て覚えたんだ」
「そ、そうですか(僕なんか長老に死ぬような目にあわされてやっと習得したのに……)」

「なら頼めないかい？自分の身は守れるようにしときたいんだ」

「分かった、ただし条件がある」

「条件？」

「ああ、傷が治った後、私と勝負をし私を認めさせてみる」

「分かったよ」

「なら決まりだ！」

「そう言うのと釈迦堂は怪我をしている亜巳を勢いよく肩に担ぎ上げた。」

「達人さんよ、コイツの事よろしく頼むわ、じゃあな」

「あ、そうだ釈迦堂さん今日の事は」

「ああ、しばらくは俺とコイツの心のなかにしまつとく、うちの弟子たちも喧嘩早いからな、教えたら闇に手を出すかも知れねえ」

釈迦堂は片手を振りながら夜の闇に消えていった。

「百代さんも少しの間この事は黙ってて下さい」

百代はコクリと頷いた、そして夜も遅くなったので兼一が百代を送り、新島たちは新たに合流した武田たちを九鬼本部に連れていった。

18話

次の日の朝、一子とタイヤ引きを終えると一子が昨日の夜遅くに百代が帰ってきたことを兼一に話していた。

「そう百代さん昨日は遅かったんだ・・・」

「ええ、少し遠くまでロードワークに行っただって言ってたわ」

「そう（良かった、百代さん約束を守ってくれてるみたいだ、まだ一子さんにほんとの事を言うのは早いからな）」

「アタシももっと頑張らないと!」

「そういえば昨日僕の仲間がまた二人来たんだよ」

「ほんとに今度はどんな人なの?」

「一人はボクサーでもう一人は杖術使いだよ」

「腕がなるわ、それと兼一さんアタシはいつから薙刀の修行をするの?」

「もう少し先だね、まずは自分自身を鍛えないと」

「そう・・・でもひたすら頑張つて強くなつてみせるわ」

(凄いガッツだ、これなら予定よりも早く武器の訓練に移れるかも)

兼一はそんな事を考えながら朝練を終えると、寮に帰りみんなと共に学園に登校した、そして兼一は昨日あつた事と武田たちの事を鉄心に話すために学長室に新島共に立ち寄った。

「兼一です」

「入りなさい」

「失礼します」

学長室に入るとそこには先客が鉄心と座って話していた、そしてその人物は兼一を見ると立ち上がり兼一に近づいた、その人物は顔が渋く年をかなりくつてはいるが、筋骨粒々とした体つきをしており服装も白い帽子に白いスーツと一昔前のギャングのような格好だった。

「よう、おめえが梁山泊の弟子だろ?」

「は、はい」

「俺は鍋島正、九州で天神館で言う学園の学長をしてる」

「九州の方ですか」

「鍋島は元々この卒業生でワシの弟子でな、たまに川神に来るんじゃない」

「そうなんですか」

「最強の弟子が来たなら話が早いわ、実はうちには西方十勇士つう俺が武術の腕を見込んでスカウトした奴等がいるんだが」

「西方十勇士・・・」

「実はソイツ等の中に忍が居るんだがソイツが言うにはこの頃十勇士をつけ回してる奴等がいるらしいんだわ」

（鍋島さん自身もかなりの実力者だ、その人がスカウトするぐらいなら若く才能がある子達ばかりだろう、まさか!?)

「察しがついたろ?そう闇の連中よ」

「やつぱり・・・」

「まあ、師匠から闇が川神の武術家を狙ってるつうのは聞いてたからな、だが考えてみりゃ川神以外にも強者と呼べるガキどもは居る、例えばうちとかな」

（守りに行こうにも九州じゃ遠すぎる）

兼一は闇の戦力がはつきりしない以上、今戦力となる梁山泊の師匠たちや新白のメンバーを二手に分けるのは得策ではないと考えていた。

「おめえが考えてること分かるぜ」

「え?」

「今川神守ってるみたいのうちも守ろうと考えてるだろ?」

「は、はい」

「ここで俺に闇を打ちのめす力がありゃその提案を突っぱねるところだが」

鍋島は突然上着を脱ぎ上半身を裸にするとその身体にはま新しい傷が複数ついていた。

「その傷はまさか!?!」

「ああ、闇の一人と戦ったんだが追い返すだけでこの様よ、しかもソイツは本気を出しちやいなかった、俺の命一つなら賭けるのに躊躇はねえが今回は教え子の命がかかってる、俺は教え子たちを守ってやり

てえ」

「鍋島さん……」

「そこで俺に一つ策がある」

「なんじゃその策とは」

「奴等の狙いは十勇士たちだけだ、だがこのままじゃ一般の学生たちも危険に晒されちまう、そこで川神に期間限定体験学習という名目で十勇士たちを川神に連れてきてえんだ」

「なるほどその方が僕たちも手が回しやすい」

「うむ、それはいつこうに構わん、うちの学生たちにも良い刺激となるじやろうしの」

「それと俺もこっちに来る」

「鍋島さんも？」

「十勇士の手綱をとれるのは今のところ俺だけだ、それに俺としても闇にやられっぱなしって訳にはいかねえ」

鍋島は闇にやられたことで弱気になるどころか内なる闘志を燃やしていた。

「それに闇との決戦の前に俺も昔の勘を取り戻しておきてえ、今川神にはお前や他の達人たちも居る勘を取り戻すにはもってこいだ、悪いがおめえ等には付き合ってもらうぜ」

「分かりました」

「じゃあ俺は早速天神館に帰って準備をしてくるぜ、準備が終わったら師匠に電話する、少し時間がかかるかもしれないねえがなるべく早く来るようにするぜ」

「分かった、それまでにはこちらも準備を整えておこう」

鍋島は学長室を出ていき部屋の中には兼一と鉄心のみとなった。

「さて兼一君ワシに何か用があったのではないのか？」

「そうでした、すみません百代さんに闇の事が」

「その事か、いずれは分かってしまうことじゃかなそれは良い」

「でもまだ一子さんや他の皆さんにはバレてません、ただ百代さんと一緒にいた釈迦堂さんと板垣さんにバレてしまいましたが」

「それに関して釈迦堂は意外と口が固い、それに板垣の長女も黙っ

てくれるようにお主が頼んでくれたのじやろう?」

「ええ」

「なら、お主が気にすることは無い、それとお主の新しい仲間、武田くんは三年のFクラスに要ちゃんはSクラスに編入することにした、それにしても、要ちゃんはクールで綺麗な子じやのう〜」

(この人に女の子を任せるのは危ない気がするなあ)

兼一は鉄心との話を終えると授業を受けだけ、そして昼休み兼一は考え事をするために一人屋上で昼飯を食べ、終わると思案するために寝っ転がった。

(さて、清楚ちゃんの事や闇の事もあし参ったな、ん?)

「僕に何かご用ですか?」

「!?!」

兼一が考え事をして居ると一人の人が近づく気配がしたのを兼一は逃さなかったすると給水塔の影から一人の女の子が兼一に近づいてきた。

「君は?」

「私は松永燕って言います」

「松永さんですか? (この子百代さんほどじゃないが強そうだ)」

「貴方は白浜兼一さんですよね」

「どうして僕の名前を?」

「私は九鬼家の紋ちゃんのお姉さんでモモちゃんを倒すために京都から来たんです」

「百代さんを?」

「でも依頼は取り消しになったんですけどね。貴方のおかげで」

「え、僕の?」

「そう、私は紋ちゃんのお姉さんの揚羽さんがモモちゃんに負けてその敵討ちの為に雇われたの、報酬は武神を倒して松永の家名を上げる事と、おとんが開発している武器のスポンサーに九鬼がなることが条件で」

(そうか、揚羽さん百代ちゃんに負けたのか)

「でも、兼一さんがモモちゃんに勝っちゃったから敵討ちの必要がな

くなつた、だから紋ちゃんはその依頼を取り下げたんです」

「僕のせいでごめんさい！」

兼一は燕が自分のせいで九鬼が研究のスポンサーを解約したと思
い責められるのを覚悟で燕に謝った、しかし燕の表情は怒っているよ
うには見えなかった。

「あのく怒ってるんじゃないんですか？」

「全然怒ってませんよ、だって紋ちゃんからは新しい依頼を受けま
したから」

「それは一体？」

「闇と戦う貴方の援護ですよ、即OKしました」

「そんな、貴女それがどんな危険なことか分かってるんですか」

「ええ、途中からだけどモモちゃんたちと闇の人の戦い見てましたか
ら」

(あの現場にいたのか!?)

「私が出ていこうとしたら貴方のお仲間が来て、出るタイミング失
いましたけど」

「じゃあ何故こんな危険なことに」

「さつきも言いましたけど私はどうしても松永の家名を上げたいんで
す、その為なら何でもする覚悟があります」

(凄い覚悟だ、この子にとっては家名を上げることがそこまで大事と
いうことか・・・)

「分かりましたそこまで言うなら」

「ありがとうございます、それと今度少し稽古をつけてくれませんか
？」

「ええ、良いですよ」

「ありがとうございます、ならお近づきの印にこれをどうぞ、それでは
ナツ、トウ!!」

燕は屋上から飛び降りていった、そして兼一の手には燕がくれた松
永納豆が握られていた。

「松永納豆？」

兼一はお近づきの記しが何故納豆なのか分からなかったが考える

間もなくチャイムが鳴り昼休みが終わってしまった、放課後一子の修行が始まる前に兼一は新島のところに来ていた。

「何だ兼一俺様に用って」

「お前の事だもうこの学園の情報はあらかたとったんだろ？じゃあ松永燕っていう子の情報はあるか？」

「何だ？まだ会ってなかったのか、あんな有名人なのによ」

「そうなのか？」

「まあ、お前が興味無さそうなことだからな、松永燕名前のおり松永久秀の子孫、川神武道四天王候補でもあり京都では納豆小町のアダ名でテレビやラジオにも出ている、しかも歌も出してるな曲名はI Loveネバーライフ、家族は父と母そして彼女の三人家族、だが現在母は別居中、理由は父が家名を上げるために金を株で儲けようとし逆に大損してしまい、夫に嫌気がさしたため、そして娘は父親の武器の発明で家名が上げれば母が帰ってくると信じている、とまあ今わかるのはこんな感じだな」

「相変わらずストーリーカーとも思える情報収集能力だな、怖くなってきたぞ」

「教えてもらってその言いぐさかよまあいい、で何で彼女の情報が欲しかったんだ？」

兼一は屋上で燕と会った時の事を新島に詳しく話した。

「なるほどな、まあいいじゃないか手伝ってくれるなら別に、それにお前の川神の武術家を強くしたいって目的にも繋がるし」

「うん、まあそうなんだけどさ、ところで松永さんのお父さんが開発してる武器ってのは？」

「それに関しては平蜘蛛という名前しか分かってない」

「平蜘蛛って確か」

「松永久秀が愛したとされる茶器だな、だがそれを武器の名前につけるとは洒落たネーミングセンスとも言える、ただ気を付けろよ」

「何が？」

「松永燕は家名を上げるためなら何でもするって噂だ、お前も利用するつもりだろうからな」

「別にそれは良いんだけどさ、慣れてるから」

「全くお人好しめ、川神百代が力で攻める動のタイプの武術家なら松永は知略で攻める静のタイプの武術家だ、経験から松永のような奴の方が手強い」

「ああ、分かってるよ、さてそろそろ一子ちゃんの修行の時間だ、じゃあありがとうな新島」

「フツ、ああ行ってこい」

兼一は教室に待たせている一子を迎えに行くために走って教室に向かった。

19話

教室に帰ると一子が兼一に修行をつけてもらおうと待っていた。

「やあ一子ちゃん待たせてごめんね」

「ううん、ところで兼一さん今日もロードワークかしら？」

「それなんだけど何処か広い所がないかな？、そろそろ巻藁を突いたりしてほしいんだけど」

「川神院は？」

「うーん、これからの修行は他の人に見られると誤解を生じるおそれがあるんだよ」

(ど、どんな修行なのかしら、でも怖くて聞けないわ・・・)

「なら俺が良い場所を提供するぜ!!」

後ろから声がしたので兼一は振り返った、するとそこには仁王立ちした翔一が立っていた。

「風間君？」

「応よ、ワン子が強くなるためなんだろう？、なら俺も協力するぜ」

「協力は良いけど、何処を紹介するつもりなのキャップ？」

「俺たちの秘密基地にしてるビルでどうだ、あそこなら水も通ってる俺の部屋からクツキーをビルに住まわせれば修行の手伝いもできるだろ、それにビルの外は広場もあるから兼一さんとの修行にはもってこいだろ、しかも廃ビルだから人も来ないしな」

「クツキーで何？」

「九鬼君がアタシにくれた世話焼きロボットなんだけどアタシには必要ないからキャップにあげたの」

「そんなことまで面倒見てくれてありがとう、風間君」

「ああ、ワン子のために協力するぜ」

「早速今日から使っても良いかな？」

「分かった、クツキーには連絡しとくぜ」

「ごめんねキャップ」

「あ？」

「私のために協力してもらって・・・」

「良いって、頑張れよワン子、俺はお前の事を応援してるぜ」

「じゃあ行こうか一子さん」

「はい!!」

「じゃあありがとう風間くん」

兼一と一子は秘密基地に向かって走っていき、翔一はその後ろ姿を見て、小さな声で頑張れよと呟いた。

秘密基地に着いた兼一と一子は、まず入り口に立っていた卵形の口ポットを見つけ、面識のある一子が話しかけた。

「クッキー!!」

「やあ一子、聞いたよ百代を倒すって言ったんだって?」

「ええ、でもアタシ本気よ」

「知ってるよ一子はそういうことを冗談じゃ言わないからね、頑張つて、僕に出来ることなら何でもするからさ」

「ありがとうクッキー」

一子と話が終わるとクッキーはくるりと兼一の方を向き今度は兼一と話始めた。

「君が白浜兼一君だよな?」

「はい、クッキーさんですよ?」

「クッキーで良いよ、キャップから一子の修行の手伝いを頼まれたから何でも言つてよ」

「ありがとうクッキー、じゃあ僕も兼一でいいよ、じゃあまずはこの棒を建てたいんだ、手伝ってくれる?」

「うん」

兼一とクッキーは二本の柱を広場の真ん中に建てた、そして柱と柱の間に棒を取り付けて鉄棒を作った。

「鉄棒でもやるの兼一さん?」

「いや、これだけじゃないんだ」

すると兼一は一斗缶を取り出した、その中にはたくさんの薪が入っており兼一はそれを鉄棒の下に置いた。

「分からないわ何をしたいのか」

「すぐわかるよ、それとこれに着替えてくれる?」

「サラシと胴着の下だけ?」

「そう、胸にサラシを巻いて服の上だけ脱いで、スカートも危ないからこの胴着を履いてね、後髪の毛も垂れ下がらないように纏めて」
「構わないけど、危ないって?」

兼一の真意は分からなかったが一子はビルの中に入り着替えた、そして外に出ると兼一は鉄棒に一子の足を結び、一子は鉄棒からぶら下がった状態になった、そして兼一は一子の真下に一斗缶を置いた。

「ま、まさか兼一さんその一斗缶に火をつけるんじゃないわよね?」
「よく分かったね、これは腹筋と背筋をしないと身体が焼ける仕組みになっていてね、僕もこれをやるときは服が燃えるから上半身だけ脱いでやるんだ、名付けてスルメ踊り」

「兼一いくらなんでもこれは」

兼一の提案する修行に否定的な言葉言うクツキーとは裏腹に一子は何かを考え込んでいた。

「でも僕はこの修行で強くなったから、一子ちゃんにも少し厳しい修行が必要だと思うんだ」

(確かに普通の修行は川神院で散々やったわ、でもアタシは思ったより実力が伸びなかった、変わった修行も良いかもしれないわね)

「でもいくら強くなるためでもそれはあぶないよ」

「やるわ」

「ええ!?!、一子危ないよ」

「アタシはどうしても強くなりたいの、その為ならどんな修行も恐れないわ」

(いや、多分僕がしてきた修行を見たら少しは恐れると思うよ)

そして兼一は薪に火をつけた、そして一子は腹筋背筋をし始めた。

「くっ!、はっ! (かなりきついわ、少しでも腹筋、背筋のペースを落とすと身体が焼ける)」

「うーん岬越寺師匠の言う通り火加減が難しいな」

「これは人が見たら警察に通報しそうだ」

「でも、ここは人が来ないから修行の邪魔にならなくて助かるよ、クツキー悪いけどもう少し薪を持ってきて」

「う、うん」

それから一時間後、スルメ踊りを終えた一子はうつ伏せになり激しく息を乱していた。

「ハア！、ハア！、ハア！、ハア！、ハア！」

「じゃあ一子ちゃんもう十分したら次の修行を始めるよ」

「は、はい」

兼一は汗だくの一子の頭の上にタオルを落とした、だが一子はまだしゃべるのもやっとの状態だったそして十分後、息を整えた一子は次の修行を始めようとしていた。

「次はこの地蔵を使つての修行だ」

「ただの重石じゃなかったのね？」

「これはうちの師匠が作った、投げられ地蔵と呼ばれるもので、これで柔術の基本の投げの練習が出来るんだ」

「柔術？、アタシ柔術は・・・」

「うん、一子さんの基本は薙刀だ、でも徒手空拳で戦わなきゃならない時もあると思うんだ、それに柔術や中国拳法には武術の基礎の体捌きや脚捌きなんかもある練習できる、決して無駄にはならないから」

「分かったわ、お願いします!!」

「じゃあまずは柔術の摺り足から始めて、最後は投げられ地蔵を投げてみようか」

兼一は少しずつ一子の体に負担がかからないように教えていくつもりだった、自分の師匠がそうしてくれたように、兼一と一子の修行は夜まで続いた。

20話

兼一と一子の修行が終わった次の日の朝、兼一は親不孝通りにある板垣家を訪れていた。

「すいませーん・・・あれ？居ないのかな？、すいませーん!!」
「うるせえな、誰だよこんな朝早くから!」

兼一が声をかけると引き戸の奥から言葉遣いの悪い女の子の声が聞こえてきた。そしてビシヤつと勢いよく扉が開き中からツインテールの赤い髪をした女の子が出てきた。

「うるせえんだよ、眠れねえだろうが!!」

「あ、あの、ここ板垣さんのお家で良いんですね?」

「あ、お前は確か武神を倒した奴じゃん」

「は、はい白浜兼一です、今日は亜巳さんに用があつて」

「亜巳姉に?」

「どくしたの、天ちやくん?」

「あ、辰姉」

赤髪の女の子と押し問答していると、さらに家の中から背の高い青い髪をした女の子がゆらりと出てきた。

「あ、どうも(この子凄いい気だ、実力を隠してるみたいだけど、完全に隠せてないな)」

「だくれ?」

「辰姉忘れたのかよ、ほら武神を倒した奴だよ」

「そうだった?」

「白浜兼一です板垣亜巳さんを訪ねてきました」

「あ、そうなんだ、私は次女の板垣辰子。亜巳ちゃんなら中だからどうぞ入って」

「簡単に入れて良いのかよ辰姉!」

「この人は信じて大丈夫だと思うな」

辰子はそう言い残すと家の中に入っていった。そして少しの沈黙の後ツインテールの女の子が呟いた。

「まあ辰姉が良いなら良いか。亜巳姉の知り合いみたいだし。アタシ

は三女の板垣天使だ」

「お邪魔します。それにしても天使か良い名前だね」

「／＼／＼うるせえ早く入れ!!」

兼一に名前を誉められ、顔を真っ赤にした天使は照れるのを隠すために兼一を怒鳴り付けた。中に入ると居間では亜巳が部屋着で朝御飯を食べていた。

「ん?なんだいあんた、何か用かい?」

「あ、いやその」

兼一は亜巳に巻かれた包帯に目を向けた。すると亜巳は兼一が何で来たのか分かり、残りの朝御飯を急いで食べて立ち上がった。

「まあここじゃなんだね。あたしの部屋においで」

「は、はい」

「あの怪我の方はどうですか?」

「流石に武神の全力の攻撃だからね、まだかなり痛むよ。それと安心しなこの傷は天や辰には修行で怪我したことにしてるからさ」

「そうですね・・・あのこれから僕に付き合ってもらえませんか?」

「デートのお誘いかい?」

「ち、違いますよ」

「冗談だよ。で何処に行くんだい?」

「僕の師匠のところですよ」

「師匠から聞いたよ。確か六人も師匠がいるんだってね」

「ええ、その一人に針治療の名医が居るんです。師匠の治療を受けてみませんか?、多分普通に治すよりも早く治ると思いますよ」

亜巳は少し考えるとニヤリと不適な笑みを浮かべた。

「そうだね。アタシもこの怪我は早く治してあの人と戦いたいし、その為なら何でもするさ」

「じゃあ」

「ああ頼むとするよ。でもあんた学校は良いのかい?」

「今日は鉄心さんに事情を話して休ませてもらいましたから」

「そうかい、それは悪い事したね」

「いえ、じゃあ行きましょう」

兼一は亜巳をつれて松江市内の梁山泊の近くにある馬鍼灸院に連れてきた。

「ここです」

「随分とポロい所だねえ、まあうちも人の事は言えないけどね」

「でも腕は一流ですから、すいません！馬師父いますか！」

「何ね、大きな声だして」

「どうも師父」

「おお兼ちゃん、どうしたね何か問題あったかね？」

「実は師父に治療してほしい人が居るんですけど」

兼一は外に待たせていた亜巳を中に招き入れると剣星の目の色が変わった。

「うひよよよ、お姉ちゃんどこのお店の人ね！美人だね！」

「ちよなんだいこいつは!?!」

剣星は何処からかカメラを取りだし亜巳の周りを回りながら亜巳を撮りだした。

「ちよ、あんたも黙って見てないで止めたらどうなんだい!?!」

「師父そろそろ止めてくださいよ」

兼一の一言でシユタツと撮ることを止めた剣星は今度はじっくり亜巳の身体を見始めた。そしてある程度見終わるとニヤリと笑いながら亜巳に問いかけた。

「お嬢ちゃん、いったい誰にこれだけの打撃を受けたね？」

「包帯の上からで打撃だとわかるのかい？」

「それはおいちゃんもプロだからね、で誰にやられたね？」

「川神で武神と呼ばれてる奴さ、まあ事故だけどね」

「事故?」

「それは僕から話します」

兼一は川神に闇の武器組のオルタル・シンが現れた事や亜巳が怪我をした経緯、そして亜巳が早く怪我を治して要と戦いたいという話した。

「なるほどね経緯は分かったね。なら早く針を打つとするかね。それにしてもこれだけなら兼ちゃんが学校休まなくてもよかったね」

「女性の事で師父は信用できませんから」

「ぐず、弟子が冷たいね」

その後も兼一は剣星がセクハラしないように針を打つ時も立ち会うため診療室にもついていった。そして針を打ちながら剣星は亜巳に話しかけた。

「お嬢ちゃん、夜の商売してるね？」

「分かるのかい？」

「身体の気がかなり乱れてるね、規則正しい生活をして無い証拠ね」

「ま、兄妹を食わせてかないといけないからね」

「なるほどね、でもこれは人生の先輩からの助言ね。身体は大切にすることね」

「ありがとう、肝に銘じておくとするよ」

剣星は淡々と針を打つていった、そのうち亜巳は気持ち良さそうに眠ってしまった。そして針が終わると兼一と剣星は病室の外で二人でお茶を飲み始めた。

「しかし兼ちゃんが弟子を持つようになるとはね」

「これで僕も一流の達人の仲間入りですかね？」

「何を言ってるねまだまだね!!それにしてもあの子は相当疲れてるよ
うね」

「ええかなり、生活もギリギリみたいですし」

「それでも身体はちゃんと鍛えてあったところを見ると、良い師を彼女が持ったようね」

「彼女の身体の方はどうですか？」

「夜の生活で乱れた気の流れも戻しておいたね。これで怪我の回復のスピードが段違いになるね」

「そこまでしてくれてありがとう」

兼一と剣星が声をした方を見ると亜巳が診療室から起き出していた。

「お嬢ちゃん起きたかね、身体の具合はどうね？」

「ビックリするぐらい痛みがないね。それに力が湧き上がってくる感じもある」

「それは何よりね」

亜巳は肩を回したり足踏みしたりして身体の調子を確かめた。それを見ていた剣星は大丈夫だと確信し亜巳を見て見てニッコリ笑った。

「それとお代は？」

「お代は要らんね。久々に若い女の子の身体が見れたそれだけでおいちゃんは満足ね♪」

剣星はそそくさと何処かに行こうとしたがそれを兼一は止めた。

「待って下さい師父、そのカメラは何を撮影したんですか？」

「・・・診療室の風景を」

「その手は引つ掛かりませんよ？」

兼一はすかさず剣星の手からカメラを捕った。そして剣星は泣きながら兼一に頼み込んだ

「・・・兼ちゃん見逃してほしいね。おいちゃんの唯一の楽しみなんだから」

「だめです!!、蓮華さんからも頼まれてるんですから」

「そこをなんとか頼むね。そうだ美羽の写真を・・・」

剣星は懐から肌の写った写真を取りだし兼一に見せようとした。

「もう騙されません。色んな事で師父にはその手で騙されましたからね」

「いけず言うもんじゃないね」

「別に構わないよ」

「え？」

声を出したのは二人のやり取りを見て呆れた顔をして笑っていた亜巳だった。

「この診療がその写真でタダになるなら安いもんさ。それに」

亜巳は続きを話そうとすると表情をコロツと鋭く笑った目付きに変えた。

「アタシのあられもない姿を撮ったんだ。次の診療も勿論便宜を図ってくれるよね？先生」

その豚を見るような目で剣星を睨み付ける亜巳の様は正しく女王

様であった。剣星が圧されていると入り口が勢いよく開き一迅の風が吹いた。

「剣星、若いお嬢さんをからかうのもそのくらいにせい」

亜巳が自分の後ろから聞こえた声の方を見るとそこには壁に寄りかかった長老が立っていた。

「このじいさん、い、いつのまに!？」

「今しがたじゃよ。世直しの旅から帰ってきたんじゃ」

「どうも長老」

「おお兼ちゃん、川神はどうじゃな？」

「色んな人がいて楽しいですね、それに新島達も来ましたから」

「そうか、兼ちゃん一人に荷を追わせまいとする九鬼と鉄心の計らいじゃろう」

「ええ感謝しています」

亜巳は恐怖していた。あのドアが開いた一瞬で自分に気づかれる事もなく、後ろに回り込んだ長老の事を、長老もそれに気づいたのか亜巳に目を向けた。

「紹介が遅れたの。ワシは兼ちゃんの師匠の一人で風林寺隼人。皆からは無敵超人等と呼ばれとるわい」

「その名前は師匠から聞いたことがあるよ（確かにこのじいさんは師匠と最強の弟子二人がかりでも勝てそうにないね）」

「まあお主の師匠の実力は分らんが、兼ちゃんではまだワシには勝てんな」

「!?、心が読まれてるのかい?」

「まあ、それぐらいはできるわい」

「敵わないね。それよりそろそろ川神に戻りたいんだけど」

「じゃあ着替えて帰りましょうか」

亜巳は着替えるために診察室に戻った。剣星はしれつとついでいこうとしたが長老に止められてしまった、そして程なくして着替えた亜巳が診察室から出てきた。すると剣星が亜巳に話しかけた。

「じゃあねお嬢ちゃん。さっき言ったように自分の身体は大切にすることね」

「ああ、気に留めとくよ」

剣星は亜巳の答えにやれやれといった表情をすると次は兼一に話しかけた。

「兼ちゃんも向こうで弟子の育成頑張るね」

「はい、師父も長老もお元気で」

「兼ちゃんや頑張るのじゃぞ。弟子のためにも、己のためにもな」

「はい!!」

そして剣星と長老は兼一たちを送り出した。そして兼一たちが見えなくなっただぐらいで長老は剣星に話しかけた。

「闇の行動が随分早かったの」

「一応逆鬼どんが例の作戦をしに行ったね」

「そうか・・・」

長老は闇との決戦が近づいて来るのを感じ、兼一や川神にいる若い武術家たちの事を心配しながら剣星の言葉に静かに答えた。

21話

兼一が学校を休んでいる中、川上学園では武田とフレイヤの二人が転入手続きをするため新島と一緒に鉄心の元を訪れていた。

「新島よ何人も転入手続きしなければならぬワシの苦労を考えてくれ」

「仕方ないだろ、闇が来るから応援を寄越せって言ったのは他の誰でもない、アンタなんだからな」

「まあ唯一の救いは要ちゃんが美人というところかの」

「止めとけよじいさん、奴は人妻なんだからな」

「ますます燃えてくるのう」

(駄目だこのジジイ)

鉄心の言動に新島が呆れていると誰かが学園長室の扉を叩いた、そして鉄心が入室を許可すると入ってきたのは二人の外人であった、一人は眼鏡をかけた細い男とその男の二回りはデカいと思われる筋肉ムキムキの男であった。

「紹介しよう、三年のAクラスの担任をしておるカラカルゲイルとFクラスの担任のカラカルゲイツ兄弟じゃ、そしてゲイルゲイツこの二人がお主らのクラスに今日から転入する、Aクラスの久賀館要ちゃんとFクラスの武田一基君じゃ」

(カラカルゲイツ、名前はアメリカにいた時に聞いたことがあるな、確か若くしてアメリカでトップクラスの経営能力を持っていて、格闘家の兄のプロデュースもしている)

(カラカルゲイル、表の世界の全米格闘家チャンピオン本物じゃなく、一度話してみたかったから川神に来て良かったじゃなく)

「ヨロシクオネガイシマース、クガタチサン」

「ヨロシクネ、タケダクーン」

一基と要は二人と握手をし自分を紹介すると予鈴がなり、一基たちはカラカル兄弟に連れられて教室に向かった、そして学長室には新島と鉄心が残っていた。

「やっとな駒が揃ってきたと言うところか？新島よ」

「いやまだ人手は足りねえ、闇相手だからなフルメンバーを揃えておきたいところだ」

「やれやれ、またワシの仕事が増えそうじゃのう」

「まあ、孫のためせいぜい頑張れよ」

新島はそう言い残すとケラケラと笑いながら部屋を出ていった。

そしてところ代わりフレイヤはS組の教室に案内され自己紹介をしていた。

「久賀館要です、皆さんより年が上でなおかつ卒業するまでの短い間ではありますがどうぞよろしく」

S組の生徒たちは要の礼儀正しい挨拶と美しい容姿を気に入るぐにクラスに溶け込むことができた、そして一限の授業が終わり一人の女子が後ろから要に声をかけてきた。

「要ちゃん」

「ん?」

要が振りかえるとそこには清楚と扇子を片手に持った和服の男が立っていた。

「清楚か、何か用かな?」

要は九鬼本部に住んでいるため、すでに清楚とは面識があり友達にまでなっていた。

「用ってほどのことはないけど、転校したてで何か困ってることはないかなって」

「いや大丈夫だがどう、ん?隣にいるのは?」

「京極彦一と言います」

(不思議な子だな)

「京極君は私が転校したての時によく面倒を見てくれたんです、それと言霊って言う言葉の力を使って」

「言霊使いか珍しいな(この子からは感じた不思議な力の正体はそれか)」

「ええ、今言葉の力は失われつつありますからね、それにしても貴女の気はとても清んでいる」

「ふふ、そうかいありがとう」

「要さん何か困った事があつたら私か京極君に相談してくださいね？」

「ああ、遠慮なくそうさせてもらおう」

要は清楚彦一と友となった、そして場所はF組に変わって一基の方も自己紹介を終えていた、最初は一基がプロボクサーとして活躍していたこともあり、生徒たちがかなり湧いていたが一基が軽くあしらい放課後にサインと握手をすることで落ち着かせた、そして最初の授業休みに入り、百代と眼鏡をかけた女子が一基に近づいてきた。

「お早うございます武田さん」

(うわく本物のプロボクサー武田一基さんだ)

「やあ百代ちゃん今日もかわいいね」

「ええ分かっています」

「おやもう一人可愛い子がいるね、ハクイ」

「こ、こんにちは矢場弓子って言います」

「弓子ちゃんか、よろしくね」

「武田さくん♪」

一基が二人と話をしていると後ろから声が聞こえ一基は振り返った、そこには燕がニコニコしながら立っていた。

(この子は確か新島が気を付けろって言った、名前は確か・・・そう松永燕ちゃんだったね)

「武田さん？」

「いやー何でもないよ、ところで何か用かな燕ちゃん」

「あたしのは知ってるみたいですねそれなら話は早い、武田さん私と戦ってもらえませんか？」

「おい燕ズルいぞ武田さんは最初私と戦う約束を」

「えー、でもモモちゃんはもう兼一さんともやったじゃない？、今度は私にやらせてよ」

一基は燕は何を言っても引かないと感じ、二人の会話に割って入った。

「百代ちゃんここは燕ちゃんに譲ってあげなよ、僕とは何時でも戦えるからさ」

「分かりました（確かに武田さんとは川神院でもやれるからな）」

「ところで燕ちゃんこれはこの学園で言うところの決闘だろうか？」

「ええ、受けてもらえますか？」

「女子の誘いを断る僕じゃないじゃない？」

二人は昼休み決闘をすることとなった、そして時は足早に過ぎていき昼休み二人は校庭に立っていた、そして周りには二人の対決を見ようと同じクラスの百代や弓子S組からは要や清楚、二年のS組からは義経たちや新島やジーク、そして風間ファミリーなども見物していた。

「うわ〜凄いギャラリー」

「臆したかい？このぐらいの方が僕は燃えてくるけどね〜」

「いえ、私もアイドルとかやってますからこの方が燃えますよ」

そして二人の真ん中にこの決闘の見届け人でもある鉄心が立ち武器を収納してある布を広げた。

「武器はこの中から使うように、それと武田君には学園で用意したグローブをはめてもらおうぞい」

鉄心が渡したグローブには普通のグローブより相手に与える衝撃を緩和するような作りがされていた。

（まあ、これぐらいのハンデ当然だね）

「私は状況に応じて武器を使うんでそこに置いといてもらっていいですか？」

「へーえ、そんなに武器を使うのか〜い？」

「ダメですか？」

「構わないよ、僕も存分に楽しませてもらうおじやなくい」

そう言うで一基はボクシングのステップを踏み、燕は鋭い目と不適な笑みを浮かべながら一基を見つめた。

22話

一基と燕の二人は戦いの用意を整えると鉄心が二人の間に入った。「両者ともによき勝負をするように、始め!!」

最初に動いたのは燕であった、燕は一基に向かって突撃し薙刀での連続の突きを一基に放った、しかし一基はこれを全て交わしてみせた。

(なるほど中々鋭い突きじゃない、でも彼女本来の戦い方ではないような気がするね)

(やっぱりこんなんじゃないやダメか・・・なら!)

燕は薙刀を上投げた、一基は一瞬薙刀を目で追ってしまい、その隙に燕は後ろへ回り込みレイピアで一基を突いた、一基は吹き飛ばされ、燕は飛んだ薙刀をキャッチした。

「さすがにかわせないですよねこれは」

「初見で躲すのは厳しいね、でも」

一基はゆっくりと立ち上がると右手のグローブを見せた、するとそこには何が当たったような跡が出来ていた。

「まさかグローブで!？」

「あの状態からはさすがに躲せないからね、とつさに君の剣をグローブで受けたのさ、しかしすごい荒技を使うね君は」

(同じ手が次は効かないことは分かっているはず、さてどんな手に出てるのか楽しみじゃない)

(あれでダメージ与えられなかったのは痛かったな、なら次は)

燕は鉄心の用意した弓矢を取るとジャンプし10本の矢を一基に向かって放った。

「今度は矢かい?、ホントに多芸だねっ!」

一基は飛んでくる矢を拳で全て打ち落としてみせた。

「じゃあ次はこんな芸はどうです?」

燕はいつの間にか一基の後ろに回り込み、一基の脚に回し蹴りを打ち込んだ。

(ボクサーの弱点は脚今度はそこを攻めて、!?)

すると一基は燕の蹴りを自分の脚の筋肉に力を込めて弾き返した、そして燕は体勢を崩しながらも少し距離を取った。

「悪いね燕ちゃん、足は子供の頃痛い思いをしてから入念に鍛えたからね、僕に普通のボクサーの弱点は通用しないよ」

(これが達人・・・)

燕は目の前にいる一基と自分の埋めがたい実力の差を感じていた、しかしこのまま何もしないまま終わりたいはないと思ってもいた。

「武田さん私ばかりじゃつまらないですよ、あなたも攻めてきてくださいよ」

「それもそうだね、なら今度は僕から行こうじゃない、オールーレンジパンチ!!」

一基は一瞬で間合いを詰めると、様々な角度に回り込み高速でパンチを放った、燕は咄嗟にガードしたが一基の連続攻撃にたまらず吹き飛ばされた。

(まずい、すぐ起きなきゃ)

「甘いよ、ドックファイトブロー!!」

一基は燕に向かって飛ぶと空中から連続パンチを放った。

(これを食らっちゃまずい!!)

燕は転がることでなんとか一基の連続攻撃を回避した、しかしガードの上からでも一基のパンチをまともに食らった燕は手が痺れて動かなかった。

(あのグローブだからこの程度ですんでるけどこれが普通の試合なら腕が折れてたね)

燕はフラフラと立ち上がり手をぶらつかせ一基を見つめた。

「手の感覚がなくなっているようだね、そろそろギブアップするかい?」

「まだまだですよ」

一基は腕が使えなくてもまだ何かをしてやろうという燕の目を見てフツと笑った。

「君面白いね、良いだろうとことん付き合おうじゃない」

「ありがとうございます、なっ、とう!!」

燕は飛び上がると一基に向かって渾身の飛び蹴りを放った。

「幻の左!!」

二人の攻撃がぶつかり合った、流石にダメージを受けている燕が一基の左に敵うわけもなく、燕は吹き飛ばされ地面を転がった、しかし燕はまたふらつきながらもまた立ち上がった。

(これでもまだ立つかい、流石にこれ以上は彼女でも危ないかな、次の一撃で意識を刈り取る!!)

一基は燕に向かって右腕を回しながら突撃した。

「ボロパンチ!!」

一基のアッパーが燕を襲おうとしたその時、燕は完璧に一基の攻撃を躲し一基の懐に入った。

(これを躲すかい!?)

「浸透勁」

燕は手の側面を相手の体に密着させ、強く踏み込むと同時に掌を押し出して勁を与えた、流石の一基もモロにくらいフラフラと後退りした、自分の秘策をもってしても倒れない一基を見て燕は悔しそうな顔をして自分の意識を手放し気絶した。

「勝者 武田一基!!」

勝負の見届け人である一心が、高々と勝者の名前を呼ぶと一基は燕に駆け寄り名前を呼んで起こそうとした、そして何度か呼んでいると燕は意識を取り戻し一基を見た。

「流石達人と呼ばれる人ですね、やっぱり敵わないや」

「いやいや最後の技は中々だったよ、しかも腕を使えないのも演技だったとはね、でも今度は本気でぶつかって欲しいかな」

「え?」

「君ほんとは平蜘蛛っていう武器があるんだろ?」

「な、何でそれを」

「こつちには何でも知ってる宇宙人がいてね、まあどんな武器かはアイツをもってしても分からないみたいだけどね」

「そ、そうですか」

「まあ、今度はもつと面白い勝負にしようってことさ」

一基は満面の笑みで親指を立てると燕はコクリと頷いて答えた、こうして二人の決闘は幕を閉じた。